

Title	アメリカ・バージニアにおける奴隷市場の発展： リッチモンドとアレクサンドリアの事例を中心に
Sub Title	The development of slave markets in antebellum Virginia: cases of Richmond and Alexandria
Author	柳生, 智子(Yagyu, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Hiyoshi review of the social sciences). No.21 (2010.) ,p.1- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20110331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカ・バージニアにおける奴隷市場の発展

——リッチモンドとアレクサンドリアの事例を中心に——

柳 生 智 子¹⁾

はじめに

19世紀前半、バージニア出身のある元軍人は「バージニアでは奴隷は育てられ、売られる運命にある、そこは奴隷の育成所である。奴隷商人は2、3人ずつの奴隷を買いながら地方を巡回し、最終的にリッチモンドに連れてくる」と述べている。同様に、ミシシッピのジョセフ・ホルト・イングラム（Joseph Holt Ingraham）は1850年代のバージニアの社会状況を観察して、「古い衰えた一族を支えていくには奴隷を年々売却によって削減する必要がある（中略）奴隷商人は邸宅から邸宅へと巡回しながら数人ずつ奴隷を集め、やがてリンチバーグ、アレクサンドリアあるいはリッチモンドに100人以上の奴隷を引き連れていく。ここでは、奴隷は市場価値のある商品として育てられるのであって、彼らの生産的な労働が目当てではないようだ」と記述した。19世紀前半のアメリカ南部で定着した国内奴隷取引において、最大の奴隷供給地となったバージニアでは、余剰の奴隷が奴隷商人の手によって先の引用のように「集積地」であったリッチモンドやアレクサンドリアに連れていかれた。こうした都市の奴隷市場は、奴隷にとっては南西部にたどり着くまでの長く苦しい道のりの出発地であった²⁾。

19世紀前半のバージニアは、1808年の大西洋奴隷貿易によるアフリカからの奴隷の直接輸入廃止後、開拓の最前線である南西部地域に奴隷を送り込む国内奴隷取引における最大の奴隷供給地であった。南北戦争（1861～65年）以前の国内奴隷取引の分析

1) 経済学部専任講師。

2) Quoted in Frederick Bancroft, *Slave Trading in the Old South* (reprint 1931, Columbia: University of South Carolina Press, 1996), 90-1.

は南部史および奴隷制研究の中でも近年特に進展が見られ、奴隷取引の実態や奴隷商人の活動、売却地域と購入地域の関係など、多くの事実が明らかにされてきた。同時に南部都市の多くが周辺地域の奴隷取引拠点の役割を果たすようになり、都市部の奴隷市場の発展については西部最大の奴隷売却地であったニューオーリンズ市場のオークションの場において、奴隷の商品化と取引の内情を詳細に分析したウォルター・ジョンソン（Walter Johnson）の研究以後、注目されるようになった³⁾。ジョンソンの研究は売買された奴隷の視点からの社会史分析の成果と評価されているが、その後は特定の地域や都市に着目して奴隷取引の発展を分析する研究は見られず、その関係性の解明はまだ不十分であると言える。

本論文では、近年の奴隷取引に関する研究を踏まえ、売却地域の中心であったバージニアにおいて2大取引拠点となったリッチモンドとアレクサンドリアの事例を取り上げる。18世紀以降の両都市の発展を分析すると、両都市とも奴隷取引の拠点として南部奴隷制拡大に貢献することになるが、それぞれ都市として持っていた機能が奴隷取引のあり方に影響を与えていたことが明らかになる。本稿では第1に、そのような都市と市場の特徴を明らかにし、それがバージニア経済の主要産業となる奴隷取引にどのような効果をもたらしたのかを分析する。第2に、南北戦争前になると南部諸州は、北部からの奴隷制廃止運動の圧力や、首都ワシントンでの奴隷制への批判、北部製造業の発展と経済体制の乖離などの諸問題を抱えるようになったが、奴隷取引のそうした問題に対してどのように対応したのかを考察する。それは南部人の間で沸き起こった南部ナショナリズムの思想と奴隷取引容認の姿勢との関係性を明確にすることでもある。これらの項目を、リッチモンドとアレクサンドリア両都市の成長の視点から分析することによって、バージニアとその都市が国内奴隷取引の商業的発展に果たした役割が明らかになると考える。

3) Walter Johnson, *Soul by Soul: Life Inside an Antebellum Slave Market* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2000). 近年の国内奴隷取引研究の代表的なものとして、Stephen Deyle, *Carry Me Back: The Domestic Slave Trade in American Life* (New York: Oxford University Press, 2005); Michael Tadman, *Speculators and Slaves: Masters, Traders and Slaves in the Old South* (Madison: University of Wisconsin Press, 1989); Robert H. Gudmestad, *A Troublesome Commerce: The Transformation of the Interstate Slave Trade* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2003); Walter Johnson ed. *The Chattel Principle: The Internal Slave Trade in the Americas* (New Haven, CT: Yale University Press, 2004) などがある。

第1節 バージニア経済と南部奴隷取引

本節では、植民地時代からのバージニア経済の特徴を示し、独立後、同州が国内奴隷取引の重要な担い手になった背景について概観する。バージニア植民地は建設時からヨーロッパを中心とした大西洋経済との結びつきを軸として発展し、特にタバコ生産を土台とした政治経済・社会体制が確立していった⁴⁾。

植民地期バージニアのタバコ生産は1616年から1680年代、1715年から独立戦争までという二つの時期に著しい成長を見せた。東部海岸地域には大プランテーションが成立し、芳香の強い品種（sweet-scented）とオロノコ種（oronoco）を主に生産し、イギリスに輸出された。大プランターは生産したタバコをイギリス商人に委託販売し、特にロンドンの委託販売商人がタバコと引き換えに、イギリスの商品や長期の手形など様々なサービスを提供した。こうしたイギリス商人は特定の植民地作物の委託販売に従事していたが、タバコの場合は品種や質の種類が多く種類ごとに市場が異なっていたため、プランターにとっては知識・経験豊富な委託販売商人と長期的な関係を築くことが重要になっていた。委託販売システムは全体としてみると、バージニア植民地のタバコ貿易初期において、富裕層を中心に定着したシステムであった⁵⁾。

独立戦争前の30年間にバージニアのタバコ貿易体制は大きな転換期を迎えることになる。それまで東部海岸地域の中小規模のタバコ生産者は大プランターを介してタバコをヨーロッパ市場に出荷していたが、タバコ生産地帯が徐々に西部へと拡大すると、大プランターを介したイギリス商人への委託販売は柔軟性がなくなっていく。内陸のタバコ生産者は、イギリスやスコットランドの商人、または地元出身の代理人が独立して営むようになった商店にタバコの販売を委託し、その場で手形取引を行なうようになった。こうした取引は「積み荷貿易」と呼ばれた。特にスコットランド商人

4) バージニアのタバコ経済についてはBruce A. Ragsdale, *A Planter's Republic: The Search for Economic Independence in Revolutionary Virginia* (Columbia: University of Missouri Press, 2003); Allan Kulikoff, *Tobacco and Slaves: The Development of Southern Cultures in the Chesapeake, 1680-1800* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1986); John J. McCusker and Russell R. Menard, *The Economy of British America, 1607-1789* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1985)などを参照。

5) Russell R. Menard, "The Tobacco Industry in the Chesapeake Colonies, 1617-1730: An Interpretation" *Research in Economic History* 5 (1980): 109-77; McCusker and Menard, *Economy of British America*, 120-3; Kulikoff, *Tobacco and Slaves*, 81.

が内陸の、検査場が近くにある場所に商店を多く設立し、輸送に伴うリスクを請け負って寛大な利率で長期手形を提供し始めたため、小規模農家から効率的にタバコを集めることができた。このような商店ではイギリス商品なども売られ、地元に着し、内陸のプランターとの信頼関係を築くことに成功した。東部海岸地域の大プランターを中心に委託販売を展開していたロンドンの商人らは地方や内陸に進出せず、スコットランド商人による内陸進出は結果的に西部へのタバコ生産地拡大を後押しすることになった。こうしたスコットランド商人は大半がグラスゴー出身で、ロンドンの商業界とは距離を置き、輸入したタバコをフランス市場に再輸出し、フランスで好まれた安価なオロノコ種のタバコを扱った⁶⁾。

1770年までにはチェサピーク湾岸地域から輸出されるタバコの半分以上はグラスゴーの商人によって取り扱われ、1738年時点の10%程度から飛躍的に上昇した。東部海岸地域で芳香種のタバコを生産した大プランターは独立戦争直前になっても委託販売システムを継続し、フランス市場と異なり、ロンドンの嗜好家に好まれた高級種市場を独占し、そこでは品種の識別・分類など長年の経験が重要になった。

一方、18世紀初頭には、過剰生産による恐慌、激しい価格変動や土地の疲弊の進行から中小規模農家の一部はタバコ生産を縮小し、ヨーロッパと西インドで拡大しつつあった穀物市場に着目し、その生産を開始している。こうした農家はタバコ生産と並行して生産を多角化し、小麦やトウモロコシなどの穀物を市場に出すようになり、18世紀半ばまでには穀物生産はバージニア経済の重要な産業になっていた。穀物生産の生産工程は農場外での作業を必要としたため、都市機能の発展に貢献した。その結果、ノフォークは穀物の輸出港として発展し、河川航行上の拠点となったリッチモンド、アレクサンドリア、ピーターズバーグやフレドリクスバーグは18世紀半ば以降、急激

6) タバコ貿易の構造的変化についてはR. C. Nash, "The Organization of Trade and Finance in the British Atlantic Economy, 1600-1830," in *The Atlantic Economy during the Seventeenth and Eighteenth Centuries: Organization, Operation, Practice and Personnel* ed. Peter A. Coclanis, 95-151 (Columbia: University of South Carolina Press, 2005)などを参照。スコットランドと積み荷貿易については、Jacob M. Price, *Capital and Credit in British Overseas Trade: The View from the Chesapeake, 1700-1776* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1980), 127-36; Edwin J. Perkins, *The Economy of Colonial America*, 2nd ed.(New York: Columbia University Press, 1988), 136. フランス市場についてはRagsdale, *Planter's Republic*, 11-16. また以下も参照。Jacob M. Price, *France and the Chesapeake: A History of the French Tobacco Monopoly, 1674-1791, and of Its Relationship to the British and American Tobacco Trades*, 2 vols. (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1973).

に成長した⁷⁾。

タバコ生産の変動はバージニアの労働力需要に大きく影響した。初期のチェサピーク湾岸地域への労働はイギリスからの白人年季奉公人が中心であったが、1680年から20～30年間で白人年季奉公人労働から、黒人奴隷労働への移行が達成されたと言われている。当初は奴隷の男女比が2対1で自然増加は見られなかったが、1720年までには自然増加が見られ、完全な奴隷制社会へと移行した。大西洋奴隷貿易体制の下では、当初西インドからの奴隷も多く入ったが、やがてロンドンの奴隷商人を介してアフリカから直接奴隷が輸入されるようになった。その後、ブリストルとリバプールの奴隷商人が台頭し、富裕なタバコ生産農家が集中したヨーク川とラバハノック川沿いに奴隷を効率的に輸送するようになった。チェサピーク湾岸地域全体で見ると、1690年から1770年の間に奴隷輸入は10万人を超え、ピーク時の1700年から1739年の間は5万4,000人以上輸入した⁸⁾。

18世紀半ばになると黒人人口の増大は顕著になり、バージニア全体では1770年の時点で19万人弱、人口の42%ほどを占めた。一方、アメリカ生まれの黒人数は増加し、独立戦争時にはほとんどの黒人はアメリカ生まれであった。自然増加率が高まるとアフリカからの直接輸入は減り、当初は北米最大の奴隷輸入地であったチェサピーク湾

7) 穀物生産への移行について、Kulikoff, *Tobacco and Slaves*, 47-8, 100-2; Paul G. E. Clemens, *The Atlantic Economy and Colonial Maryland's Eastern Shore: From Tobacco to Grain* (Ithaca: Cornell University Press, 1980); David Klingaman, "The Significance of Grain in the Development of the Tobacco Colonies," *Journal of Economic History* 29 (1969):268-78 などを参照のこと。

8) 年季奉公人についてはChristopher Tomlins, "Indentured Servitude in Perspective: European Migration into North America and the Composition of the Early American Labor Force, 1600-1775," in *The Economy of Early America: Historical Perspectives and New Directions*, ed. Cathy Matson, 146-82 (University Park: Penn State University Press, 2006). 労働力転換についてRussell R. Menard, "From Servants to Slaves: The Transformation of the Chesapeake Labor System," *Southern Studies* 16, no.4 (1977): 355-390; Anthony S. Parent Jr., *Foul Means: The Formation of a Slave Society in Virginia, 1660-1740* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2003), chap.2. バージニアの大西洋奴隷貿易については以下も参照。Lorena Walsh, "New Findings about the Virginia Slave Trade," *The Colonial Williamsburg Interpreter* 20 (summer 1999):11-21; Lorena Walsh, "Mercantile Strategies, Credit Networks, and Labor Supply in the Colonial Chesapeake in Trans-Atlantic Perspective," in *Slavery in the Development of the Americas*, eds. David Eltis, Frank D. Lewis and Kenneth Sokoloff, 89-119 (New York: Cambridge University Press, 2005); Herbert S. Klein, "Slaves and Shipping in 18th Century Virginia," in *The Middle Passage: Comparative Studies in the Atlantic Slave Trade* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1978), 121-40.

岸地域は、18世紀半ばにサウスカロライナ植民地に追い抜かれ、サウスカロライナは1760年の時点でバージニアの年間3倍以上の奴隷を輸入するようになっていた。これはバージニアでの奴隷の自然増加に加えて、タバコとともに拡大した穀物生産がそれほど多くの奴隷労働を必要としなかったことも要因となった⁹⁾。

過剰になりつつあった奴隷人口に対し、植民地政府は高い関税を課すなど政策的な制限も試み、既に多くの奴隷を所有していたプランターは奴隷輸入によって所有する奴隷の資産価値が低下することも恐れていた。独立後は北部州を中心に各州が次々と奴隷制を廃止し、バージニアも1778年に奴隷輸入を廃止するが、奴隷人口の増加には歯止めがかからなかった。1787年の憲法制定会議の場で、連邦としての奴隷貿易廃止が議題となったが、サウスカロライナとジョージアは奴隷貿易により多大な利益を上げていたため強硬に反対し、州間の対立が明確になった。同会議のサウスカロライナ使節団の一人であったチャールス・C・ピンクニー (Charles Cotesworth Pinckney) はバージニアについて、「奴隷の価値が上昇し、(バージニアは) 既に必要以上の奴隷を州内に所有しているため、奴隷輸入を停止することで利益を上げることができる」と指摘した。これは、西部領土の拡大で奴隷を必要とする開拓地があること、そこに奴隷を送り込むことは有益なビジネスになることを念頭に置いた発言であったと言える。憲法制定会議では、その後20年間は奴隷輸入の継続か廃止の決定を各州の判断に委ねることになったが、その間に州間の奴隷移動は徐々に定着し、国内奴隷取引のネットワークも形成されていった¹⁰⁾。

国内奴隷取引は植民地時代から小規模ながら見られた。奴隷は資産であったため、借金の代用にされ、遺産の相続・整理の際に売却されることは頻繁にあった。近隣の労働力の貸借の延長として余剰奴隷の売却が見られるようになり、独立後、各州が奴隷の直接輸入を禁止すると、こうした取引は徐々に遠隔地間で、商人を介して行な

9) Philip D. Morgan, *Slave Counterpoint: Black Culture in the Eighteenth-Century Chesapeake & Lowcountry* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1998), 58-62.

10) 奴隷輸入規制の関税については Darold D. Wax, "Negro Import Duties in Colonial Virginia: A Study of British Commercial Policy and Local Public Policy," *The Virginia Magazine of History and Biography* 79, no.1 (Jan. 1971):29-44. ピンクニーの引用は Tadman, *Speculators and Slaves*, 15. 憲法制定会議での奴隷取引の議論は、Don E. Fehrenbacher, *The Slaveholding Republic: An Account of the United States Government's Relations to Slavery* (New York: Oxford University Press, 2001), 29-47; Steven Deyle, "The Irony of Liberty: Origins of the Domestic Slave Trade," *Journal of Economic Review* 12 (1992): 37-62. 参照。

われるようになっていった。また、プランターが不作などで経済的に困窮すると、奴隷を売却、もしくは賃貸奴隷市場で一定期間貸し出すことも行なわれた。

バージニアでは余剰奴隷の州外流出とともに、白人人口の流出も激しくなった。西部の新しい領土に上昇機会を求めて移住する若者が増え、奴隷売却による利益をもとに西部で土地を買うものもいた。所有する奴隷と一緒に西部に移住して新しいプランテーションを建設するパターンも世紀転換期に多く見られた。西部人口が増えるにつれて、西部で土地の開拓は進み、奴隷の需要は伸びたため、1790年から1810年の間にバージニアから6万4,000人ほどの奴隷が流出し、1810年代にはバージニアの東部海岸地域に住む奴隷の4人に1人は州外に売却されたと言われる。南部人にとってバージニアはかつてのタバコ生産や、建国の父たちの故郷として以上に、「新世界のギニア」、あるいは「アメリカの半分を黒人化した」州として認識されるようになった¹¹⁾。

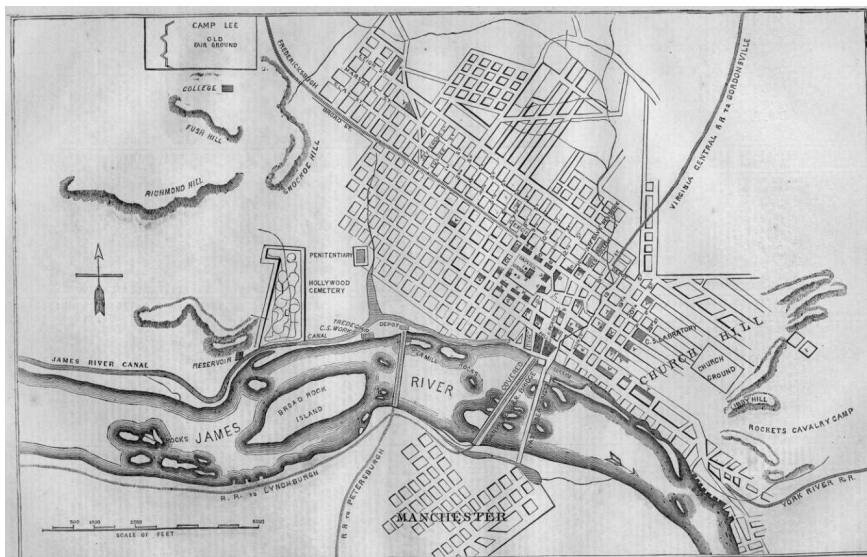
バージニアは植民地初期のタバコ中心の経済から、農業の多角化で穀物生産も取り入れた混合農業地帯へと変化していった。さらに、労働形態は白人年季奉公人からアフリカからの輸入による奴隷労働へと移行し、18世紀半ばまでには自然増加と経済構造の変化によって奴隷労働が過剰傾向に陥った。この余剰奴隷は、西部への領土拡大の時期にあって、奴隷が必要とされる西部地域へ効率的に輸送する組織的な奴隷取引システムによってバージニア経済を潤すことになった。このような背景で定着していたバージニアの奴隷売却の実態を把握するため、次節以降、州内の2大奴隷取引拠点に成長するリッチモンドとアレクサンドリアの都市としての発展について分析する。

第2節 リッチモンドの発展：南部奴隷市場の最大供給拠点

独立戦争後のバージニア州では多くの奴隷取引の拠点が成立していった。なかでも最大の市場となったのは、植民地期から既に経済成長が見られたリッチモンドであった。リッチモンドは地理的にも市内を流れるジェームス川が沿岸のノフォークと大西洋につながっており、海上交易のアクセスに恵まれていた。リッチモンドに続く重要

11) Philip Troutman, "Slave Trade and Sentiment in Antebellum Virginia" (Ph.D. dissertation, University of Virginia, 2000), 24-5. George M. Weston, *The Progress of Slavery in the United States* (1857) quoted in Robert E. Conrad ed., *In the Hands of Strangers: Readings on Foreign and Domestic Slave Trading and the Crisis of the Union* (University Park: The Penn State University Press, 2001), 223-8.

な拠点となったアレクサンドリアは、1801年から1847年まではコロンビア特別区の一部として、その後はバージニアの独立した都市として、奴隷取引が行なわれるようになった。この2都市以外にも、ピーターズバーグ、フレドリクスバーグ、リンチバーグ、ノフォークなどもそれぞれ周辺地域における奴隷市場を形成していたが、リッチモンドとアレクサンドリアは取引の規模や南部全体にとっての取引拠点としての影響力の点で、その重要度が高かった。独立戦争後のリッチモンドとアレクサンドリアは、それぞれ特徴的な発展を遂げるが、それはバージニア全体の政治経済の発展と深く関連していた。本節ではその過程がアンティベラム期のバージニアが国内奴隷取引に経済的に依存していく様相を示していることを説明する。



地図1 リッチモンド、1862年

出典) The City of Richmond, Virginia, drawn by a refugee just escaped from Secessia. Map. *Harper's Weekly*, August 9, 1862 New York: Harper & Brothers, 1862. *The Civil War: Harper's Weekly Original Civil War Newspapers*. <http://www.sonofthesouth.net/leefoundation/the-civil-war.htm> (accessed August 2, 2010)

1. リッチモンドの発展の概観

リッチモンドの取引拠点としての歴史は17世紀まで遡る。同市は早くからタバコの取引拠点として、またネイティブ・アメリカン奴隷取引拠点として発展し、1670年代以降はバージニア植民地の西部ピドモント地域にイギリスからの年季奉公人を送り出す拠点にもなっていた¹²⁾。ウィリアム・バード2世 (William Byrd II) は初期リッチモンドの建設に大きな影響を及ぼした人物であり、ジェームス川の河岸、ショッコー・クリーク (Shockoe Creek) に1720年代までに小さな居住区を建設したと言われる¹³⁾。その後同地区にタバコ倉庫を作り、それは1730年の倉庫法の制定によって、ヨーロッパ市場へ輸出されるタバコの政府指定の検査・保管場所となった。リッチモンドは1742年に正式に市制が敷かれ、その後数十年は都市としての成長は緩やかであった。独立戦争前のリッチモンドは人口600人程度の都市であったが、その頃にはピドモント地域や後背地のタバコ・プランターたちの作物を、一旦リッチモンドに運んだ後、ジェームス川から倉庫へ運ぶ、その中継地としての役割が重要になっていた。さらに後背地全域にとってリッチモンドは小売の拠点でもあり、周辺農民は繊維製品や金属製品、香辛料などの必需品の購入のために市内に出入りした。タバコ貿易は都市の成長に欠かせない要素となったが、植民地期のもう一つの重要な産業となったのは穀物貿易であり、小麦ととうもろこしの取引が盛んになった。前節で述べた通り、作物生産の多角化により穀物輸出は18世紀後半のバージニアにとって重要な産業となるが、リッチモンドはその穀物の製粉の拠点となったのである¹⁴⁾。

12) インディアン奴隷の取引についてはChristina Snyder, *Slavery in Indian Country: The Changing Face of Captivity in Early America* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2010) 参照。

13) 「ショッコー」という地名 (ショッコー・クリーク、ショッコー・スリップ、ショッコー・ボトムなど、ジェームス川沿いの低水位地区についた名称) の名の由来については、以下参照。Jeffrey Ruggles, “A Possible Origins for “Shockoe”(and the Names “Shockoe Slip” & “Shockoe Bottom”),” August, 2010, *Ruggles Origin of Shockoe 8-10*, <http://www.scribd.com/doc/36421679/Ruggles-Origin-for-Shockoe-8-10> (accessed September 1, 2010).

14) Werner H. Steger, ““United to Support, But Not Combined to Injure”: Free Workers and Immigrants in Richmond, Virginia During the Era of Sectionalism, 1847-1865” (Ph.D. dissertation, George Washington University, 1999), 34; James Sidbury, *Ploughshares into Swords: Race, Rebellion, and Identity in Gabriel’s Virginia, 1730-1810* (New York: Cambridge University Press, 1997), 151, 158; George D. Kimball, *American City, Southern Place: A Cultural History of Antebellum Richmond* (Athens: University of Georgia Press, 2000), 15.

リッチモンドが1780年に州都になると、人口や産業が徐々に集まるようになったが、さらに大きな拠点にするためには周辺と結ぶ交通の発展が重要となった。独立後の州政府による内地開発と都市整備が実を結び、1840年代までには8つのターンパイク、大きな運河と2つの鉄道で他の大都市とつながるようになった¹⁵⁾。1784年に州議会はまずジェームス川航行会社 (James River Navigation Company)、のちのジェームス川運河会社 (James River Canal Company) にジェームス河岸に運河を作る許可状を与えた。この運河は1800年に完成している。その後西への開拓と交易が進むにつれ、リッチモンドとオハイオ川を結ぶ必要から、議会はジェームス川・カナワ運河 (James River and Kanawha Canal) に建設許可状を与えた。19世紀になると鉄道建設がリッチモンドの成長を刺激し、特に1830年代から40年代にかけての鉄道建設ブーム期に、リッチモンド・フレドリクスバーグ・ポトマック鉄道 (Richmond, Fredericksburg and Potomac Railroad) の建設によって、リッチモンドはワシントンからボストン間の主要都市と結ばれた。州の南方に延びるリッチモンド・ダンヴィル鉄道 (Richmond and Danville Railroad) は1840年代に建設され、西方へもリッチモンド・ヨーク鉄道 (Richmond and York Railroad) が加わった。西方への鉄道建設はリッチモンドへタバコを運ぶ農家の範囲を拡大することになり、この範囲は後にリッチモンドの奴隷市場に送られる奴隷の居住範囲と重なることになった¹⁶⁾。

1800年から1840年の間にリッチモンドの黒人、白人を合わせた合計人口は3.5倍の成長を示した (表1)。1840年に人口が2万人ほどであったリッチモンドは、同時期に10万人以上の人口であったボルチモアやニューオーリンズには及ばなかったが、州都として、また市内の奴隷労働力の需要において、他の都市には見られない独自の発展を示した¹⁷⁾。

15) Midori Takagi, “*Rearing Wolves to Our Own Destruction*”: *Slavery in Richmond, Virginia, 1782-1865* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1999), 17.

16) バージニアの鉄道建設については、ペンシルバニアの鉄道建設との比較分析である John Majewski, *A House Dividing: Economic Development in Pennsylvania and Virginia Before the Civil War* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2000), または Kenneth W. Noe, *Southwest Virginia's Railroad: Modernization and the Sectional Crisis* (Urbana: University of Illinois Press, 1994), chap. 1, 2, 5を参照のこと。

17) Sidbury, *Ploughshares*, 165; Steger, “United to Support,” 21; Kimball, *American City*, 67-70.

表1 リッチモンドの人口, 1800-1850

年	白人	奴隷	自由黒人	計
1800	2,837	2,293	607	5,737
1810	4,807	3,748	1,180	9,735
1820	6,445	4,387	1,235	12,067
1830	7,755	6,345	1,960	16,060
1840	10,718	7,509	1,926	20,153
1850	15,274	9,927	2,369	27,570

出典) *U.S. Bureau of the Census, Population, 1800-1850.*

2. 主要産業の発展：タバコ、製造業と奴隷労働

バージニアのタバコは北米植民地最大の輸出品であり、植民地建設時からチェサピーク湾岸地域の経済を支えてきたのは先に述べたとおりである。リッチモンドの成長においてもタバコの貢献度は高かったが、世紀転換期あたりからリッチモンドはタバコの集積地としてだけでなく、市内の企業家らによって開始されたタバコ、特に噛みタバコの加工地としても発展し、原材料輸出と製造の両面に関わるようになった。その結果、19世紀前半までにはタバコ製造は州内で最も成長著しい産業としてリッチモンド経済を支配するようになり、1850年代には全国一のタバコ製造拠点となった。しかし、リッチモンドの製造業はタバコのみではなかった。製粉業においても全国2位の生産量を誇り、1850年代には鉄鋼、銅、真鍮などの生産も大幅に増加し、これらの製造工場数も1850年から1860年の間に倍近く増え、労働者数は4倍に増えた。こうした生産物はそれまでの輸出先であったヨーロッパ市場だけでなく、アメリカ西部や南米にも輸出されることになる。アンティベラム期のリッチモンドは製造業都市としての側面を強めることになった¹⁸⁾。

リッチモンドは早くからタバコ集積地・検査地としての役割を果たしてきたが、19世紀半ばになるとその傾向は一層顕著になり、1853年には州内生産のタバコの約46%、61年には6割以上の検査がリッチモンドで行なわれた(表2)。アンティベラム末期には、リッチモンドには59のタバコ製造工場が存在し、3,400人以上の黒人労働者が雇われていた¹⁹⁾。このタバコのほとんどはイギリスのグラスゴーの業者のエージェントが

18) Takagi, *Rearing Wolves*, 73, 17.

19) Joseph Clarke Robert. *The Tobacco Kingdom: Plantation, Market and Factory in*

購入していた。前節で述べたように、グラスゴウのタバコ商人は18世紀半ばに急成長し、バージニアの西部を中心に勢力を伸ばしていた。他の産業も、1860年には鉄鋼業の工場が市内に35存在し、1,600人以上の労働者を、製粉業は2大工場が250人ほどの労働者を雇用していた²⁰⁾。

表2 バージニア州リッチモンドにおけるタバコ検査量, 1840-1860年 (ホグスヘッド)

年	リッチモンド	バージニア州合計	リッチモンドの占める割合(%)
1840	20,738	58,034	35.7
1841	—	—	—
1842	23,129	52,800	43.8
1843	22,829	56,492	40.4
1844	19,147	4,886	41.7
1845	21,902	51,126	42.8
1846	19,572	42,679	45.8
1847	19,993	51,726	38.6
1848	15,773	36,725	42.8
1849	18,803	44,904	41.8
1850	17,086	41,926	40.7
1851	—	—	—
1852	—	—	—
1853	23,488	50,567	46.4
1854	23,739	47,862	49.5
1855	29,458	57,872	50.9
1856	36,695	65,357	56.1
1857	30,534	52,910	57.7
1858	44,616	71,103	62.7
1859	41,798	69,069	60.5
1860	46,630	76,997	60.5

出典) Robert, *Tobacco Kingdom*, 74.

Virginia and North Carolina, 1800-1860 (Durham, NC: Duke University Press, 1938), 74. タバコの検査についてはLewis C. Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860*, vol. 1 (reprint 1933, Clifton, NJ: Augustus M. Kelley Publishers, 1973), 225-31. アンティベラム期は、南北戦争前の時期を指す。

20) Takagi, *Rearing Wolves*, 72-3.

タバコ製造業の成長は市内の黒人人口の増加と密接に結びついていた。1800年時点では市内のタバコ製造工場は3つの小さな作業場で22人の労働者を使うのみであったが、1840年には30以上の製造工場で1,000人近くの労働者を雇い、その7割以上は奴隷労働者であった。1840年から60年の間も、タバコ製造業における奴隷労働力は全労働者の8割から9割を占めた。タバコ工場での労働は男性奴隷が多かったため、都市の男性奴隷人口は増加した。同時に都市における奴隷需要が多かった家内奴隷は女性奴隷であったため、女性奴隷人口も多く、リッチモンド市内では奴隷の男女比の偏重が少なかった。これは、女性奴隷が多かった他の南部主要都市と比較すると、珍しい特徴であった。さらに、他の南部都市と比べると、ボルチモア、チャールストン、ニューオーリンズはそれぞれ1840年から1860年の間に全人口における奴隷人口の割合が減ったのに対し、リッチモンドはその間4,000人以上の増加が見られた（表3）²¹⁾。1860年の時点で、アイラ・バーリン（Ira Berlin）とハーバート・ガットマン（Herbert Gutman）の計算によると、リッチモンド市内の成人男性労働者の48%が奴隷であった。南部都市ではチャールストン（51%、7,887人）とリンチバーグ（60%、1,623人）がより高い割合を示したが、雇用奴隷数ではリッチモンドが9,557人と他の都市よりも多かった²²⁾。奴隷労働はタバコ製造以外にも鉄道建設、製粉工場、鉄鋼業、市内の清掃業などでも使われた。また、リッチモンドの労働者の人種・地位の割合を見ると、1820年には奴隷が36%、白人が55%、自由黒人が8%であったが、1840年にはそれぞれ43%、49%、8%となり、さらに1860年には48%、44%、7%と、白人比率が減少し、都市における奴隷労働者の割合が高くなっていた²³⁾。

こうした都市の製造業工場における奴隷は1年単位で賃貸されることが多く、そのためリッチモンドでは賃貸奴隷市場が活発であった。奴隷の賃貸交渉はクリスマス直後から新年までの間に行なわれる。奴隷の賃貸価格はアンティベラム期のリッチモンドでは上昇を続け、1840年には成人男性は年間約90ドル、成人女性は年間約34ドルが賃貸相場であったが、1860年には男性が120ドル、女性が45ドルにまで上昇した。賃貸市場で仲介の役割を果たした業者の数も増え続け、1845年には賃貸奴隷の専門業者は

21) Takagi, *Rearing Wolves*, 18-9.

22) Ira Berlin and Herbert Gutman, "Natives and Immigrants, Free Men and Slaves: Urban Workingmen in the Antebellum American South," *American Historical Review* 88, No. 5 (Dec., 1983): 1175-1200.

23) Takagi, *Rearing Wolves*, 74-5.

表3 南部諸都市における奴隷人口の変化, 1840～60年

年	ボルチモア	チャールストン	ニューオーリンズ	リッチモンド
1840	3,199	14,673	23,448	7,509
1860	2,218	13,909	13,385	11,699
増減 (1840年～60年)	-981	-764	-10,063	4,190

出典) Richard C. Wade, *Slavery in the Cities: The South, 1820-1860* (New York: Oxford University Press, 1964) 325-7.

市内に17社あったが、1860年には49社もあった²⁴⁾。

このように都市で奴隷労働が有効に利用され、経済的に利益をもたらすようになると、地元の企業家や政治家はリッチモンドを南部経済発展の成功例として取り上げるようになった。1850年代以降、リッチモンドの例は隆盛した南部ナショナリズムの思想と結びつき、工場で奴隷を用いることを奨励して南部の製造業産業の成長や自給力を示すことで、北部や奴隷制廃止運動からの厳しい批判を交わそうとした。奴隷労働を農場での作物生産に使用し、結果的に作物収益の多くが北部金融資本に還流される南部の北部への経済的従属関係を打破し、南部製造業に奴隷を活用できるようになれば、これまで北部に独占されてきた製造業部門でも、南部は競争できるようになると考えたのである²⁵⁾。このように奴隷を用いた北部型製造業都市としての発展が、南北戦争前のリッチモンドを特徴づける重要な要素となっていた。

3. 信用調査に見るリッチモンド商人層の発展

独立戦争後のリッチモンドにおける商人と商業関係者は、血縁関係や政治家・権力

24) Takagi, *Rearing Wolves*, 22, 38-52, 80-90. 南部奴隷取引の賃貸市場については以下を参照。Jonathan D. Martin, *Divided Mastery: Slave Hiring in the American South* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2004).

25) 南部ナショナリズム (southern nationalism) はキリスト教的親奴隷制主義を核として北部資本主義からの政治的、経済的、また文化的独立を唱えたが、その研究蓄積は多くある。最近ではRobert E. Bonner, *Mastering America: Southern Slaveholders and the Crisis of Nationhood* (New York: Cambridge University Press, 2009) など。南部プランテーション作物の輸出による利益が北部に吸収されていたことはHarold D. Woodman, *King Cotton and his Retainers: Financing & Marketing the Cotton Crop of the South, 1800-1925* (Lexington: University of Kentucky Press, 1968) 参照。タバコの製造も1850年のバージニアとノースカロライナの生産高の半分はニューヨーク資本に頼っていたといわれる。Kimball, *American City*, 32.

者との関係で一層緊密化し、都市エリート層を形成していた。リッチモンドの商人層は、植民地期はイギリス商人とのつながりが強かったが、対イギリス関係は独立戦争後大きく転換し、イギリス商家に雇用されていたバージニア商人の多くは「ジュニア・パートナーとしての身分に満足せず、自ら取引を行ない、土地を買い、自分の富を築いてバージニアの美女と結婚する」ことを追求し始め、独立して商業活動を行なうようになったと言われる²⁶⁾。そうして独立した地元商人もいたが、イギリスとのつながりを切れず、イギリス商人の資本を目当てに商業を行なうものも多くいた。

独立戦争での貿易の中断を乗り越えた地元の商人は鉄鋼、石炭、タバコ製造業や製粉業など新しい産業に投資し始め、独立後のリッチモンドの経済基盤を作った初期の企業家として成長していった。イギリス資本との連携を維持した商人たちは、1783年に戦争が終結すると北部との取引にも進出した。独立前から北部との取引は存在したが、独立戦争後にリッチモンドに移り住む北部商人が増加し、それまでイギリスから直接購入していた商品を、ニューヨークやフィラデルフィアなどの北部都市経由で購入することが多くなった。さらに、北部との取引拡大の要因として、人口の増加で人々の嗜好が多様化し、それに応じた多様な製品が必要になったこと、リッチモンド市内の製造業の発展がその材料・道具などの調達のために北部都市へ行く必要性を生じさせたことがあった。また、北部の企業家から製造業経営の知識や技術を得るという目的もあった。こうしてリッチモンドの商人は一年のうち春と秋を北部で過ごし商品を購入するパターンを、少なくとも1840年代にリッチモンド内で十分多様な商品が揃うまで、続けることになった。アンティベラム末期になると、リッチモンドの商人コミュニティは北部の商人コミュニティと強い連携を持つ集団になっていた²⁷⁾。

一部の北部出身の商人はリッチモンドで目覚ましい活躍をした。ここでコネチカット出身のホラス・ケント (Horace Kent, 以下ケントはホラス・ケントを指す) という人物の例を、当時の信用調査資料を元に取り上げたい。信用調査の記録によると、ケントの主要店舗 (Kent, Paine & Co.)²⁸⁾は1855年に「繊維製品、オークション業、委

26) John Spencer Bassett, *The Writings of "Col. William Byrd, of Westover in Virginia, Esqr."* quoted in Kimball, *American City*, 16.

27) Samuel Mordecai, *Richmond in By-Gone Days: Reminiscences of an Old Virginia* (Richmond, VA: George M. West, 1856), 30-1; Kimball, *American City*, 23, 84-6, 108.

28) Kent, Paine & Co. は1855年にKent, Paine & Kent と名称変更する。R. G. Dun & Co.が行なった当時の商業信用調査は19世紀前半から残されている。R.G. Dun & Co. Collection,

託販売業」を行ない、「大きなビジネスを営み、かなりの額の資金を貸付け、ニューヨークとイギリスに良好な関係のパートナーを持っているので緊急の時は援助してもらえる」と記されている。ケント自身は奴隷所有者でもあり、リッチモンド市の貿易委員会長にも選出されている。その店舗は市の中心部メイン通り（Main Street）に位置し、「豪華な店で、ブロードウェイ・スタイルの繊維製品を売る店としてはリッチモンドで初めての例である」と言われた²⁹⁾。

ケントは同時にケント・ケンダル・アンド・アトウォーター（Kent, Kendall and Atwater）という社名の下でオークションと委託販売業を行っていた。アトウォーターはニューヨークに不動産を所有する資産家で、ケンダルは記録では「あまり資産を持たず、ケントのような商才はない」とされたが、ニューヨークに住み、北部商人とのつながりが強かったことから、会社は「リッチモンドで最大級の繊維製品の取引」を行ない、会社の総資産額は30万から40万ドルに上った。1845年7月の調査報告の時点で同社は「ニューヨークのウォール・ストリートの会社の支店で、資産は十分ある」と記されている。翌年、リッチモンド在住のオランダ出身の商人で、多くの事業を資金的に援助していたジョン・エンダース（John Enders）の支援を受けたジェームス・J・ケント（James J. Kent）とウィリアム・G・ペイン（William G. Paine）を同社の新しいパートナーとして採用している。エンダースは参入したばかりの商人が独立できるまでを援助する資産家のタバコ商人で、ケントもこのつながりからタバコ産業に参入していた。1846年の時点でケントは既に2万ドルと推計される邸宅に住み、新しく建設された羊毛と綿花の工場にも投資してかなりの利益を挙げていた。1850年に経営していた複数の会社の事業を統合し、それらを合わせた資本金は10万ドルを超え、その経営手腕は「全ての面で第1級」と称賛された。ケントは商人層の重鎮となり、所有不動産が2万5,000ドル、事業は年間50万ドル以上の取引を行なったと報告さ

Baker Library, Harvard University Graduate School of Business Administration (Harvard Business School). この資料についてはJames H. Madison, “The Credit Reports of R.G. Dun and Co. as Historical Sources,” *Historical Methods Newsletter* 8 (Sept., 1975): 128-131; James H. Madison, “The Evolution of Commercial Credit Reporting Agencies in Nineteenth-Century America,” *Business History Review* 48 (1974): 164-86.を参照のこと。

29) Virginia, Vol. 43 [Richmond City], p. 121, R.G. Dun and Co. Collection, Harvard Business School (以降HBS); Mordecai, *Richmond in By-Gone Days*, 45, 49. ケントの店舗の2軒隣には近隣の商人たちの情報交換の中心であった酒場があり、国内外のニュースや様々な風評が回った。

れた。彼の会社は地域内の小規模会社の多くを支配下におさめていた。ケントがこれほど活躍できた背景の一つに、有力商人とのつながりが指摘でき、特に「様々な金融取引を大規模に行ない、……我々の街の最大の金融業者で資本家のジョン・エンダースと緊密につながって」いたこと、そのためケントはエンダースから「何でも欲しい設備は準備してもらえる」状況にあった。1858年にはケント・ペイン・アンド・カンパニーはバージニア最大の商家となっていた。その売り上げは年間80万ドルに上り、事業価値が25万ドルから30万ドル、事業以外でも5万5,000ドルの資産を所有していた³⁰⁾。

北部出身者だけでなく、外国出身の商人も商人コミュニティで影響力を持つようになっていた。先に登場したオランダ系商人のジョン・エンダースは、タバコ製造業に従事するだけでなく、金融業者として貸付を行ない、多くの会社や商人を支援した。タバコ製造業で成功したターピン・アンド・ヤーボロー (Turpin & Yarborough)、ウィリアム・H・グラント (William H. Grant) など、当初はエンダースの金銭的援助を受けたと言われる。エンダース一族の支配は広範で、例えば繊維製品、タバコ製造業などを営むワッツワース・アンド・ターナー・アンド・カンパニー (Wadsworth & Turner & Co.) は1838年9月の信用調査で第1級の商家との評価を受けているが、この会社はジョン・エンダースの娘婿たちによって運営されていた。その会社は175人以上の従業員を雇い、生産するタバコは年間15万ドル以上の価値になっていた³¹⁾。

南北戦争直前になると、リッチモンド商人が関わる貿易圏の拡大傾向が見られた。例えば、バランフ・アンド・カンパニー (Ballanff & Co.) は1850年代に事業を開始し、ヨーロッパ市場にタバコを送っていた。会社のパートナーであるカマン (C. Camman) はボルチモアからリッチモンドにきたタバコ商人であったが、バランフ自身はニューオーリンズに住んでいた。彼らの取引はカマンの父がドイツで商売を行っていた関係で「ヨーロッパの商家と非常に良い関係を築いていた」という。また、南米諸国の独立や、カリフォルニアの建設によって南米や西海岸までバージニアの取引は拡大し、特に製粉業は1834年から50年の間、世界最大規模の複数の製粉所が毎日1,000バレル以上を製粉し、月に3万バレルを南米のブラジル市場に輸出していた。新

30) Virginia, Vol. 43 [Richmond City], p. 182, R. G. Dun and Co. Collection, HBS.

31) Virginia, Vol. 43 [Richmond City], p. 182, 102, R.G. Dun and Co. Collection, HBS. John Enders については Roberts, *Tobacco Kingdom*, 192-3 参照。

たな市場を開拓した業者としては、ハクスール・アンド・ブラザース (Haxall & Bro.) が南米とカリフォルニアで取引し、ジョージ・アンド・ロバート・ハーヴェイ (George & Robert Harvey) は製粉業だけでなく、ブラジル政府と契約して鉄道建設への鉄鋼の供給にも関わっていた。こうした信用調査の報告から、南北戦争前のリッチモンド在住の商人たちは、州や周辺地域の枠組みを超えた貿易圏を形成していたことが示される。バージニアの人々は植民地時代から大西洋経済圏との関係が深く、対外貿易の長い経験と蓄積があったが、南米との直接貿易や、西海岸との商取引は19世紀半ばになって進出した地域であり、貿易に新たな局面をもたらした³²⁾。こうした進展は、リッチモンドの他の南部都市とは異なる性格を一層、強めることになった。

4. 奴隷取引と奴隷商人

リッチモンドは早くからネイティブ・アメリカン奴隷や年季奉公人の取引で労働市場の拠点としての役割を果たしてきたが、同市は大西洋奴隷貿易でバージニアにきた奴隷の到着地でもあり、イギリス奴隷商人から委託販売の依頼を受けたリッチモンドの商人らの手によって、奴隷が売却されるようになった³³⁾。そのような背景はあったが、リッチモンドの「国内」奴隷市場としての役割が重要になるのは19世紀初頭に専門化した奴隷商人が登場し、その数が増え始めてからであった。

外国や北部の旅行記録に、リッチモンドの奴隷市場の組織的な取引の様子が記述されている。プランターや奴隷商人がオークション会場に集まり、奴隷はその場で身体を入念に検査され、歩き回され、「タッターソールの馬やクリスティーとマンソンの絵画のように」売られた、と記録されている³⁴⁾。市内に入ってくる船や埠頭に奴隷を見かけない日はなかった、とも記されている。奴隷のオークションに参加した人たちは「尊敬される社会的立場のある人々」が多く、そのような服装や風貌であった。オークション業者は参加者にその日に売られる奴隷の性別や年齢、特筆すべき能力・技術、身長・体重などの情報が書かれた価格表を配布した³⁵⁾。オークション開催の目印とし

32) Virginia, Vol. 43 [Richmond City], 163, 335, 60, 220, R.G. Dun Collection, HBS; Steger "United to Support," 37; Takagi, "Rearing Wolves," chap. 4.

33) 大西洋奴隷貿易とバージニアについては注8参照のこと。

34) *Chamber's Journal of Popular Literature* (Edinburgh) no. 31, August 5, 1854, 89-92. in Conrad, *In the Hands of Strangers*, 164-172.

35) 「南部紳士」的な装いはあごひげをたくわえ、大きな帽子、長い黒いコート、ローカッ

表4 1850年代初頭のリッチモンド奴隷オークションの価格表（\$）

18歳から25歳の「最高級」の男性	1200～1300
良い状態の18歳から25歳の男性	950～1050
5 フィートの少年	850～ 950
4 フィート 8 インチの少年	700～ 800
4 フィート 5 インチの少年	500～ 600
4 フィートの少年	375～ 400
若い女性	800～1000
5 フィートの少女	750～ 850
4 フィート 9 インチの少女	700～ 750
4 フィートの少女	350～ 452

出典) *Chamber's Journal*, 89-92.

て店頭に赤い旗が掲げられ、売られる予定の奴隷の表が店外に貼り出された。先の旅行者が訪れた1850年代初頭のオークションで手渡された奴隷の価格リストが表4に示されている。なおこのオークション開催時は市場の動きは鈍く、価格は低下傾向にあったと言われている。

こうしたオークション会場はリッチモンドの中心部であるフランクリン通り (Franklin Street) と15番通り (15th Street) 近辺に集中していた。この場所はバージニア州議会からわずか2ブロックしか離れていなかった (地図2)。特に悪名高かった巨大なオークション会場はセント・チャールズ・ホテル (St. Charles Hotel) とエクスチェンジ・ホテル (Exchange Hotel) であり、前者は15番通りとメイン通りの角に、後者はフランクリン通り上に、14番通り (14th Street) とローカスト小道の間に建ち、14番通りには多くの奴隷取引商人が事務所を構えていた。最も多く取引が行なわれたのは14番通りと15番通りの間、フランクリン通りとメイヨ通り (Mayo Street) の角にあるオッズ・フェロウズ・ホール (Odds Fellows Hall) と呼ばれる建物の地下で、この建物は政治関連の会議も頻繁に開かれ、コンサートや催しも開かれる場所であった。この地階はバージニア州全土で最も奴隷売買が活発に行われていた。リッチモンドでは15番通り、メイン通り、フランクリン通り、ブロード通り (Broad Street) あ

トのウェストコート、杖などを身に付けた。Bancroft, *Slave Trading*, 104; *Chamber's Journal*, 89-92; Kimball, *American City*, 76-7, 62-3.



地図2 リッチモンド奴隷地区（1840年代～1860年）

注）地図中の番号は以下を示す。①エクスチェインジ・ホテル②バラード・ホテル③セント・チャールズ・ホテル④オッズ・フェローズ・ホール⑤ランプキン監禁所⑥ベイコン・テイト監禁所⑦オモホンδρο監禁所（1）⑧オモホンδρο監禁所（2）⑨ヘクター・デビス監禁所⑩奴隷埋葬所（取引前に死亡した奴隷はここに埋められた）

出典）John Murden, "Richmond and Manchester 1897," Map. February 28, 2009 via Flickr, Creative Commons Attribution. Original by George Crow, http://chpn.net/news/2009/03/01/an-older-map-of-richmond-and-manchester_4555/ から作成。

たりに奴隷商人たちが集中し、これらの通り沿い、またはこれらに沿った不規則な作りの小道や路地で行なわれた取引が、バージニアだけでなく、南部中の奴隷所有者やプランターに影響を与えたと言っても過言ではなかった。15番通りは奴隷商人を支援する銀行やブローカーが集中したことから「ウォール・ストリート」と揶揄された³⁶⁾。15番通り近辺は奴隷を売却までの間、一時的に滞在させる監禁所も集中し、それに通じる路地は「ローカスト小道 (Locust Alley)」, 「監禁所小道 (Jail Alley)」や「ランプキン小道 (Lumpkin's Alley)」などと呼ばれた。ランプキン小道は監禁所の所有者であったロバート・ランプキン (Robert Lumpkin) の名のついた最大の監禁所沿いにあった³⁷⁾。同じく有名な奴隷商人であったサイラス・オモホンドロ (Silas

36) セント・チャールズ・ホテルはもともとベル・タバーンという酒場であったが1846年以降シティ・ホテル、別名セント・チャールズ・ホテルとなった。1812年戦争時の入隊施設としての役割も果たしたが、それよりも奴隷オークションを頻繁に行なった場所として知られた。トマス・タリアフェロ (Thomas Taliaferro)、ベンジャミン・デイビス (Benjamin Davis)、チャーチル・ホッジス (Churchill Hodges)、デビッド・プリアム (David Pulliam)、プリアム・アンド・デイビス (Pulliam and Davis) など、市内で活動した奴隷商人がこのホテル内に事務所を構えたと言われる。また、エクステイナジ・ホテル内にもジョージ・ジョーンズ (George Jones)、プリアム・アンド・スレイド (Pulliam and Slade) など5社以上の事務所が常時設けられており、エクステイナジと、その向かい側に建つバラード・ホテルとは、フランクリン通りを挟んで2階部分が渡り廊下で繋がっていた。セント・チャールズ・ホテルは現在リッチモンドを通るインターステイト95号高架の真下にあった。オッド・フェロウズ・ホールの地下には奴隷商人兼奴隷の衣服販売に従事したルイス・レヴィ (Lewis B. Levi) が仕事場を持ち、少なくとも市内大手7業者が彼に奴隷の衣服を依頼したと言われる。Bancroft, *Slave Trading*, 106. リッチモンド奴隷取引地区はインターステイト95号と鉄道駅 (メイン・ステーション) の建設で現在では当時の建物はほとんど残っていない。現在のリッチモンド旧奴隷取引地区については以下のウェブサイトも参照。http://www.hmdb.org/marker.asp?marker=25961.

37) ランプキンの監禁所 (Lumpkin's Jail) はショッコー地区に「悪魔の2分の1エーカー」 (The devil's half acre) と呼ばれた巨大な面積を占め、レンガの壁で囲われ、その跡地は当時より地表が約15フィート上昇しているが2008年以降本格的な発掘作業が続けられている。監禁所は4つのレンガ造りの建物からなり、それぞれランプキンの住まい兼事務所、奴隷を売りに来た所有者用の宿泊施設、台所と食事をする建物、奴隷用監禁施設であった。Deyle, *Carry Me Back*, 115-6参照。なお、ランプキンの監禁所はベイコン・テイトとルイス・コリアー (Lewis Collier) という奴隷商人によって1825年に建てられたといわれるが、テイトはその後15番通りとケアリー通りの角と、ショッコー・ボトムにさらにもう1か所監禁所を営する一方、市政にも参加した。テイトは1835年までには定期的にニューオーリンズに奴隷を輸送する大規模な奴隷商人となり、リッチモンド有数の富裕な商人として南部最大級の奴隷取引会社フランクリン・アンド・アームフィールド社 (Franklin & Armfield) のパートナーでリッチモンドを拠点とした奴隷商人ライス・C・バラード (Rice C. Ballard) の重要な取引パートナーでもあった。Bancroft, *Slave Trading*, 95-6; Deyle, *Carry Me Back*, 153. なお、

Omohundro) や、バイコン・テイト (Bacon Tait) の監禁所も同じ地区にあった。オークション前の奴隷は窓に鉄格子がかかった監禁所に閉じ込められ、奴隷を売りに来るプランターたちはこうした監禁所に奴隷を預けた。監禁所はオークション会場に近いので奴隷が逃亡することも難しく、購入者たちも近隣のホテルに滞在しており、取引に関わる全てが数ブロック内にまとまっていたことになる³⁸⁾。

南部で最大級の奴隷市場が発達したリッチモンドには取引規模も様々な、多くの奴隷商人が商売を行なった。奴隷商人だけでなく、オークション業者も市内には多く、彼らは委託販売手数料が収益となった。オモホンδρο・アンド・サイラス (Omohundro and Silas) のように大規模な取引を長期間、展開した会社もあり、1840年代で最も活躍した奴隷商人はホッジス・レイ・アンド・プリアム (Hodges, Ray & Pulliam), シドナム・グレイディ (Sidnum Grady), デイッキンソン・ヒル・アンド・カンパニー (Dickinson, Hill & Company) らであった。こうした奴隷商人のネットワークや財政状況について、当時の信用調査の資料を元に検証することは可能である。当時の信用調査では流動資本よりも不動産所有などを評価する傾向にあったため、奴隷取引商は評判が良くはなく、商売自体が投機的な性質のものと判断された。R・H・デイッキンソンは1850年代に「この商売（奴隷取引）の人たちは完全に信頼できるとは言えない。彼らの商売は投機的であるため、その（支払い）手段は現金であって（担保がなく）常に不安定である」と評価されている。信用調査での評価は良くなかったが、デイッキンソン・ヒル・アンド・カンパニーが提供する奴隷の価格情報などは、他の奴隷商人の多くが信頼できる情報源として利用していた。バージニアの奴隷商人ウィリアム・フィニー (William Finney) と彼のネットワークはデイッキンソンの会社から提供される奴隷価格情報に常に関心を払っていた。フィニーのパートナーであるフィリップ・トマス (Philip Thomas) はアラバマ州のモービルでデイッキンソンから、リッチモンド市場の奴隷価格について次のような情報を受け取っている。「この市

バロードについては拙稿「南部奴隷取引の発展およびその拡大と支持の背景—ネットワークによる経営戦略と世界観の形成—」『アメリカ経済史研究』第7号（2008年11月）21-40頁参照。

38) ファンシー (fancy) と呼ばれた、若く魅力的な女性だけを集めた監禁所や、「第1級」 (No.1 stock) の奴隷のみを集めた監禁所もあったと言われている。Bancroft, *Slave Trading*, 102. Kimball, *American City*, 62-3; R. A. Brock Esq., *Richmond as a Manufacturing and Trading Centre: Including a Historical Sketch of the City* (Richmond, VA: Jones & Cook, 1880), 28-9.

場では奴隷の売買が活発になっている…最後のオークション時から価格は良い状態で維持されている。最も良い奴隷（No.1）が足りない所以需要である。市場は以下のような価格で取引されている。最も良い男性奴隷19歳から25歳まで、1,400ドルから1,500ドル。最も良い少年15歳から18歳まで、1,350ドルから1,450ドル、10歳から14歳は900ドルから1,300ドル。最も良い少女16歳から22歳までは1,200ドルから1,350ドル、10歳から15歳は900ドルから1,150ドル。女性と子供の売れ行きは良い」³⁹⁾。

奴隷取引で利益を上げていても、奴隷商人の身分では信用調査で好評価を得るのは難しかった。ディッキンソンのパートナーの一人であったナサニエル・B・ヒル（Nathaniel B. Hill）は1848年の報告ではオークション業を営み、「人格的に最も良いとは言えず、奴隷を売買している」と書かれ、彼の会社 N&C・B・ヒル社（N & C.B. Hill）は奴隷のみを売却するオークション会社と報告されたが、1856年には200万ドル相当の奴隷を売却しており、その売上は5万ドルにも上った⁴⁰⁾。

ナサニエル・ヒル同様、奴隷取引に関わっていたため、評判が悪い人物も多くいたことが信用調査から明確になる。例えば S・H・フィシャー（S.H. Fisher）はブロード通りの3番と4番通りの間に靴販売の店舗を構えて1854年まで利益を挙げていたが、そのころ信用調査に「モラル的に問題があり、奴隷を誘拐して州外に売ることでこの6、7年利益を挙げている」と書かれている。また「シェーバー」と呼ばれた高利貸し集団も評判は悪かった。チャールス・パーマー（Charles Palmer）という人物が州外からリッチモンドで商売を行う息子に対して「（リッチモンドの）役人や裁判所は下品な好事家、ギャンブラー、奴隷商人やシェーバーによって構成されているので汚職に注意」と忠告しており、具体的にベイコン・テイトやナサニエル・ヒルなどリッチモンド市政の役人で奴隷取引に関わる人物名をあげていた。奴隷取引だけでなく、幅広く商業活動を行なったダヴェンポート（Davenport）一族も信用調査では「金持ちのシェーバー」と書かれている。シェーバーは厳しい取り立てと高い利子率で評判が悪く、こうした業者は奴隷取引にも関わっていることが多かったことが信用調査から

39) Philip Thomas to Jack Finney, 6 January 1859, Philip Thomas to Jack Finney, 24 December 1859; W. Finney to Jack Finney, 30 January 1860; William A. J. Finney Papers, Perkins Library Manuscripts, Duke University. (以下 Finney Papers)

40) Deyle, *Carry Me Back*, 117-9; Virginia, Vol. 43 [Richmond City], P. 109, 70, 88, R. G. Dun and Co. Collection, HBS.

うかがえる⁴¹⁾。

奴隷取引だけに従事して利益を上げることができる商人はリッチモンドでも多くはなかった。そのため、商人の多くは奴隷取引と並行して他の商売に従事し、奴隷取引を副次的な事業という印象を持たせることで信用調査会社の悪評を免れる例もあった。例えばジョセフ・アンド・ヘンリー・スターン (Joseph and Henry Stern) はリッチモンドでは繊維製品を中心とした小売業を営む一方、ニューヨーク州やイリノイ州にある店舗とも連携し、さらに奴隷取引も行なっていたが、「契約上何ら問題はない（信用できる）」と記されている。ブリッジフォード・アンド・カンパニー (Bridgeford & Co.) の場合は、ブリッジフォード、N・フィンスリー・ペイト (N. Finsley Pate) とトマス・E・マシューズ (Thomas E. Matthews) の3者のパートナーシップで構成されており、委託販売・先物取引業を営んでいたが、マシューズが個人資産を2万ドル以上持つ奴隷商人であるにもかかわらず、評判は良かった。この会社は1万5,000ドルの資本金で設立され、1858年には売り上げが22万ドルにも上ったが、マシューズが1860年8月にパートナーシップから離れると会社も解散した。マシューズはその後独立して取引を開始し、単独での信用調査報告では「奴隷商人として利益を上げており、契約上問題ない」と書かれている。1861年の4月の時点ではまだかなり裕福で、「ニューオーリンズに拠点を置き、リッチモンドは支店の一つ」として取引拠点を変更していた。他の奴隷商人同様、彼の資産は「ほぼ全額現金」であった。しかし、1865年にはマシューズについて「他（の奴隷商人）同様、彼の職業はもう存在しない」と、南北戦争後の奴隷取引業の終焉が示唆されている⁴²⁾。

先に見た製造業の拠点として多くの奴隷を工場で雇用したリッチモンドのもう一つの側面が、ジェームス川沿いの低地を中心に活発に取引が行なわれた奴隷市場の存在であった。連日監禁所からオークション会場に連れられ、広範囲から集結したプランターや商人らに奴隷が売却されて西部へと送られていく様子は、アンティベラム期のリッチモンドでは日常的な光景になっていたのである。

41) Kimball, *American City*, 111-112; Virginia, Vol. 43 [Richmond City], p. 59, R.G. Dun and Co. Collection, HBS. ダヴェンポート一族には Edmund & Davenport や Davenport, Davenport & Allen & Co. などが見られた。シェーバーについては以下参照。Edward E. Baptist, “‘Cuffy,’ ‘Fancy Maids,’ and ‘One-Eyed Men’: Rape, Commodification and the Domestic Slave Trade in the United States,” *American Historical Review* 106 (Dec. 2001): 1619-50.

42) Virginia, Vol. 43 [Richmond City], p. 388, 265, 359, R. G. Dun and Co. Collection, HBS.

5. 南北戦争直前のリッチモンド

19世紀半ばになるとリッチモンドの商業は、国内の政治状況に直接影響を受けることになった。バージニアでは、南部への北部資本の浸透は、南部経済の根幹にある奴隷制を廃止させようという北部の意図が背後にあるように解釈され、南部で広く支持されたキリスト教的親奴隷主義イデオロギー（proslavery ideology）と真っ向から対立するようになった。奴隷商人とその取引に対しては、南部内からも批判的な意見が出されていた。しかしバージニアでは、奴隷取引がリッチモンドの重要な商業の一つで、市だけでなく州全体に利益をもたらしており、奴隷取引を円滑に行い、奴隷制の存続に貢献することは南部経済の順調な繁栄のための必要悪であると認識していた。アンティベラム末期になると北部商人とつながりの深い商人による北部商品の流入や、北部の金融的支配に脅威を感じるリッチモンドの住人が増えた。リッチモンドは州都であり、また南部権利団体（Central Southern Rights Society）などの拠点であることから、親奴隷主義を根幹とした南部ナショナリズムの高揚が南部都市の中でも際立ち、その対立姿勢と緊張は、まず住民の間で北部商品を避ける動きとなって表面化した。この北部商品の非売運動はやがて、宗教、教育、人種問題を含めた北部の思想・体制の拒絶という方向に拡大していった。

しかし北部従属型の経済体制からの脱却は困難であった。リッチモンド商人層は北部の連邦統一主義的思想と、南部の経済的ナショナリズムの二派に分断されたが、アンティベラム末期にかけて後者の方が徐々に勢いを増すようになった。南部ナショナリストの典型であった商人ダニエル・H・ロンドン（Daniel H. London）は、繊維製品の輸入を扱い、頻繁にイギリスで商品を購入したが、彼は「南部の権利を主張する人物で連邦統一反対主義者であるため、商品を北部で買うことはない」と報告され、「連邦の分断を支持した」と記録されている。奴隷商人にも、北部商品の排斥の動き、北部との対立の動きは伝わった。奴隷商人フィリップ・トマスはいずれ「このすべての（南北の）対立がなくなる」と期待したが、南部の人たちは様々な「会議を開き、北部人からこれ以上商品を買わないように誓い、北部へのタバコの輸送を廃止し、北部を完全に切り離そう」と議論しあっていた様子を伝えており、南北対立状況がますます悪化していることを実感していた⁴³⁾。製造業工場の発展が見られたリッチモンドであ

43) Kimball, *American City*, 100-103; Virginia, Vol. 43 [Richmond City], p. 93, R.G. Dun and Co. Collection, HBS; Philip Thomas to Jack Finney, 3 December 1859, Finney Papers.

ったが、工場労働者としての奴隷の確保と、奴隷取引による利益から、奴隷の存在は経済活動の根幹にあった。南部政治の重要な拠点であったリッチモンドでは、奴隷制擁護を掲げる南部ナショナリズムが政治と商業の両面から、一般住民へと浸透していた。

以上から、リッチモンドの都市としての発展と奴隷市場の形成の特徴がいくつか指摘できる。リッチモンドでは商業の発展とともに、アンティベラム期にはタバコ製造や製粉業などの産業が成長し、効率的なサービスと新たな経営戦略を生むメトロポリスになっていた。市内の奴隷人口の拡大は製造業の発展によるところが大きく、賃貸奴隷市場も発達した。こうした商人層の発達と、産業化の傾向は北部都市型の発展との類似点も見られた。商人と産業の繁栄の基盤には活気溢れる国内奴隷市場の存在があり、その規模の拡大はリッチモンドだけでなく、南部全体に影響を及ぼすようになった。取引の実態は冷酷で、専門の業者によって効率的かつ組織的に行なわれ、市場が形成された市内の一角には州内外から売却者・購入者が集結した。リッチモンドは州都として内地開発による近代化路線を行政で果たし、かつ製造業の成功で北部産業と競争できる土台を形成していたにも関わらず、奴隷制度が政治の場面で議論されるようになると、奴隷取引による利益を保護する必要から急進的な南部ナショナリズムの中心となっていた。19世紀半ばにはリッチモンド市民は奴隷制度と奴隷取引を南部繁栄の絶対的要素として理解し、諸産業や商人層の継続的発展、さらに市の存在意義も、奴隷取引に依拠するようになっていたと言える。

第3節 アレクサンドリアの発展：「議事堂前」の奴隷取引

アレクサンドリアはバージニアのもう一つの奴隷取引の中心地であった。アレクサンドリアは1749年に自治体として成立するが、その後、1789年にバージニアがアレクサンドリアを含む領土を連邦政府に割譲し、1791年に10マイル四方のコロンビア特別区が形成され、1801年からコロンビア特別区の行政下に置かれた。その後、1846年までアレクサンドリアは正式にはジョージタウン、ワシントンとともにコロンビア特別区の一地区となった⁴⁴⁾。アレクサンドリアはアメリカの首都に含まれるという政治的

44) Bancroft, *Slave Trading*, 45. なお、1800年の時点で特別区内の人口は約1万4,000人であり、ワシントン、アレクサンドリア、ジョージタウン居住者の合計は約1万1,000人であっ

表5 アレクサンドリアの人口, 1790～1860年

年	白人	奴隷	自由黒人	計
1790	2,153	543	52	2,748
1800	3,727	875	369	4,971
1810	4,903	1,488	836	7,227
1820	5,742	1,435	1,168	8,345
1830	5,609	1,627	1,371	8,241
1840	5,758	1,064	1,627	8,459
1850	6,390	1,061	1,283	8,734
1860	9,851	1,386	1,415	12,652

出典) U.S. Bureau of the Census, Population, 1790-1860, in Miller, *Alexandria on the Potomac*, 126.

側面と、市の地理的な条件からリッチモンドとは異なる発展の過程をたどった。アレクサンドリアでもタバコ取引が行なわれ、1820年ごろまではリッチモンドと同じ人口規模で推移した（表5）。この節では主に市の発展と奴隷取引の関係に注目して論ずる。

1. アレクサンドリア発展の概観

アレクサンドリアから輸出されたタバコの多くはメリーランドで生産され、イギリス商人への委託販売でヨーロッパ市場に出荷された。独立戦争中、アレクサンドリアはアメリカ軍への物資配給地としての機能を果たし、1788年にアレクサンドリアを訪れたフランス人旅行家は、アレクサンドリアは「現在はボルチモアより小さいが、いずれ追い抜かす」であろうと書いている。この同じ旅行家はアレクサンドリアが「自然条件に恵まれ」、特に「川と海峡の深さや、埠頭の安全性によって大きな船が入ることを可能にし、船を錨で停め、波止場を占領することを可能にした」点が都市の成長に結びついたと述べている。また、アレクサンドリアがより一層発展するには「後背地の豊かな資源と結びつくことによって、街をより広い範囲での商業の中心にする必要がある」と指摘した⁴⁵⁾。

た。同区内の奴隷人口は23%であったが、これは後に減少し、1830年には15%、1860年には4%しか奴隷はいなかった。Fehrenbacher, *Slaveholding Republic*, 53-60.

45) Mary G. Powell, *The History of Old Alexandria, Virginia: From July 31, 1740 to May 24, 1861* (Richmond, VA: The William Byrd Press, 1928); Robert, *Tobacco Kingdom*, 73. 引用は Michael Miller, *Artisan and Merchants of Alexandria, Virginia, 1784-1820* Vol.1 (Bowie, MD:

引用にあるように、アレクサンドリアは地理的な利点、特に恵まれた港によって都市としての地位を確立した。港湾都市としての機能は1784年にジョージ・ワシントン、トマス・ジェファソン、ジェームス・マディソンが支持し、アレクサンドリアがポトマック川の公式な港であることをバージニア議会で決定したバージニア・ポート法（Virginia Port Act）によって強まった。1795年には全国で7番目の規模の港となり、小麦粉の輸出では全国3位であった。アレクサンドリアには多くの倉庫や広い波止場があり、埠頭はあらゆる種類の船に対応できた。対外的にはポルトガル、スペイン、西インドとの貿易が大規模に行われ、特に西インドはバージニア近辺の穀物、木材、工場製品などの重要な市場となり、西インドからは砂糖、ラム酒と糖蜜を輸入した。アレクサンドリア港からの国内への沿岸貿易はニューイングランドが中心で、海外輸出作物の一部は一旦ニューヨークに輸送され、そこから出発していた。アレクサンドリアから内陸へ向かうルートでは、独立戦争後にウィンチェスター、リーバークなどにターンパイクが通じ、ニューヨークとはボルチモアとフィラデルフィアを経由した馬車のルートができた。ジョリー・タール（Jolly Tar）と呼ばれた、ボルチモアと結んだ地元乗客専用の馬車もでき、アレクサンドリアとリッチモンド間もフレドリクスバーグを経由する馬車で結ばれた。1820年代には同じコロンビア特別区内のジョージタウンとの間を蒸気船が1日2往復し、アレクサンドリアとフレドリクスバーグ間、またワシントンとノフォーク間も蒸気船が走るようになった⁴⁶⁾。

アレクサンドリアは沿岸航行の出航地として、また内陸移動の出発地として利点があり、そのため奴隷移動の拠点として好まれる条件を満たしていた。奴隷商人らが、特別区内に事務所を設けて区内を拠点として取引することは奴隷制廃止論者、北部や外国からの旅行者、連邦議会議員にとっては驚きであった。その上、1830年ごろから、交通上の利便性から、ジョージタウンで行なわれていた取引のかなりの部分が国会議

Heritage Books Inc., 1991), 9 より。コロンビア特別区内ではバージニアとメリーランド両州のそれまでの法律を受け継いだ。この地区に首都が建設された過程など、詳しくは Fehrenbacher, *Slaveholding Republic*, 53-88.

46) Miller, *Artisan and Merchants*, 13-14. ミラーによると、ポルトガルがアレクサンドリアから出荷されたトウモロコシの57%, 小麦の54%, 小麦粉の27%を輸入し、スペインはトウモロコシの24%, 小麦粉の27%を輸入した。西インド諸島は小麦粉の最大市場で、アレクサンドリアの輸出の半分近くを輸入した。Powell, *Old Alexandria*, 265; Anne Royal, *Sketches of History, Life and Manners in the United States* (New Haven, 1826), 8-10, quoted in Miller, *Artisans and Merchants*, 20-30.

事堂をはじめ政府関連施設の集中するワシントンに移動し始めた。地域内で最大級の取引を行っていた業者はアレクサンドリアに拠点を置きつつも、取引の多くをワシントン内で、代理人を派遣して行なうようになっていった。この時期、アラバマやミシシッピなどで新しく開拓された西部綿花地帯が最盛期を迎え、南西部の奴隷需要が急騰し、奴隷供給地点となったコロンビア特別区は奴隷取引の「まさしく王座であり、中心」と言われた⁴⁷⁾。

しかし、1820年代にはアレクサンドリアの経済は衰退傾向に陥った。運河や港の機能は利益をもたらしたが、新たに建設されたボルチモア・アンド・オハイオ鉄道 (Baltimore and Ohio Railroad) はアレクサンドリアを通らず、チェサピーク湾岸の他の地域が、発展する西部と鉄道で結びついたことはアレクサンドリア経済にとっては大きな痛手となった。1810年代に繰り返し発生した金融恐慌や、市内での疫病の蔓延も経済的打撃となった。常に近隣のボルチモアと比較され、アレクサンドリアは一時「小さなフィラデルフィア」と呼ばれるまでになっていたが、アンティベラム期途中からその影響力が弱まっていった⁴⁸⁾。しかしアレクサンドリアは、西部に奴隷を海上および陸上輸送する出発地点として重要な位置に依然としてあり、奴隷取引こそがアレクサンドリアが特別区及びバージニアに最も経済的に貢献する活動となった。

2. アレクサンドリアと奴隷取引の実態

1860年のアレクサンドリアの人口の22%は自由黒人と奴隷であった。自由黒人は様々な技術職につき、新年のころに賃貸契約を獲得するため、一斉に雇用主と交渉を行なった。アレクサンドリアの賃貸奴隷市場はアンティベラム末期において、成人男性で年間80ドルから120ドル、女性40ドルから75ドルであったと言われる。アレクサンドリアの奴隷人口は1790年の時点で市の5分の1を占めていたが、南北戦争直前には10分の1ほどになっていた。特に1830年代の間に奴隷の割合が人口の19%から13%へと減少した。州内では1860年のリッチモンドで人口の30%、フレドリクスバーグで25%、ノフォークで22%となっていたのに対し、アレクサンドリアは11%と少なかった。

47) Bancroft, *Slave Trading*, 49.

48) *The Confessions of a Rambler: The Repository* Vol. 3, no. 8 (London, 1824) 278, in Michael Miller, *Portrait of a Town: Alexandria District of Columbia [Virginia], 1820-1830* (Bowie, MD: Heritage Books Inc., 1995), 7-10.

た。リッチモンドと比較すると、タバコなどの製造業の工場が市内になく、特別区内の家内労働は自由黒人や賃貸奴隷だけでなく白人の率も高かったことが大きな差となった。市内の奴隷人口の女性比率が3分の2と高いことも、リッチモンドに比べて男性奴隷の工場労働者が少なかったことを示している⁴⁹⁾。

アレクサンドリアで奴隷人口が増えなかったのは、大西洋奴隷貿易の到着地としては発展しなかったことや、首都圏から奴隷を締め出す様々な法律による影響も大きかった。1794年に連邦議会は特別区内でバージニアとメリーランドの奴隷を売買することを禁じたが、1814年にはアレクサンドリア在住のものであればコロンビア特別区内に奴隷を持ち込むことを認めたため、結果的にアレクサンドリアは奴隷取引の拠点になった。特別区内で奴隷取引を行なうには400ドルのライセンス費用を支払う必要があったが、それを支払い、法律を遵守すれば取引が可能であった。1802年のある記述では「アメリカ内の別の場所から特別区に奴隷を購入するために（人々が）来ている」ことから、アレクサンドリアでは「悲惨で、人間の退廃した光景が見られ、自由な政府の市民にとっては恥すべき」行為が行なわれていると言われた。特別区の管轄では、ワシントンの住人がアレクサンドリアに行き、奴隷を購入しワシントンに戻り、その奴隷を売るもしくは居住させることは法律上禁止されていた。しかし、アレクサンドリアの住民が所有する奴隷をワシントンに持ち込むこと、またワシントンの住人が奴隷をアレクサンドリアに持ち込むことは認めていた。また、ワシントン郡の住人（ワシントンとジョージタウンを含む）は既に所有する奴隷を地元や他地域で売ることができたが、所有または売却するための奴隷はメリーランド以外から得ることは禁じられていた。それ以外の地域から奴隷を地区内に入れる場合は、所有者とともに連れてきた奴隷については区内に入ることではできたが、その後3年間は売却が禁止された。さらに複雑であったのは、奴隷の購入は購入地で完了する必要がある、奴隷の売却は特別区司法管轄区域外に移動させた後でないと成立しなかった。こうした法的規制にもかかわらず、移動中の売却前の奴隷が一時的に特別区内に住むことに対しては規制がなかったため、このような事情を把握していない旅行者や外国人から見ると、特別区内にあたかも活発な奴隷市場があるかのような印象を与えた。しかし、特別区内は「市場」としての役割以上に、「集積所」または「流通拠点」としての役割が強かった。

49) Miller, *Portrait of a Town*, 37-41.都市の奴隷人口の男女比は、家内奴隷として雇用される女性奴隷が多かったため、女性の比率の方が一般に高かった。

ある下院議員は、「この非道な取引に比べると、アフリカからチャールストンやジャマイカに送られた（大西洋）奴隷取引の方が慈悲深かった。特別区をただ単に通過するのと、組織的な奴隷市場として奴隷の集積・発着所となり、奴隷の全てのつながりを断ち、監禁所に投獄して後に家畜のように売られるのでは、大きな差がある」と述べている⁵⁰⁾。こうして特別区は「組織的な奴隷市場の交易拠点」として都合のよい場所となり、奴隷はチェサピーク湾岸地帯全域から集められ、そこから南西部へと送られる出発地点となった。この状態は「1850年の妥協」によって国内奴隷取引が特別区から排除されるという政治的決断が下されるまで、続くことになった⁵¹⁾。

アレクサンドリアにはマーケット・スクエア（Market Square）と呼ばれた中心広場が一つあった。この一角の南側を東西に走るキング通り（King Street）と、市を南北に走るセント・アサフ通り（St. Asaph Street）の角に、インディアン・クイーン（Indian Queen）と呼ばれた建物があり、その歴史は植民地時代にまで遡った。独立後は建物名を一時的にレッド・ライオン・タバーン（Red Lion Tavern）に変更し、「豪華な馬車、美しい馬、丁寧な運転手」がいるとともに高級な夕食会が開かれる場所になっていた。その後1797年に元の名称に戻ったが、1802年にはフレデリク・クーンズ（Frederick Koonen）が二人の経営者と共同で、キング通りとウォーター通り（Water Street）の角にあたる場所に、娯楽施設兼酒場として新たなインディアン・クイーン・タバーン（Indian Queen Tavern、以下インディアン・クイーン）を開いた。このクーンズらによる新しい酒場は宿舎も兼ねていた。一方、元の場所にあったインディアン・クイーンの建物はボルチモアとフィラデルフィアに向けて出発した馬車の停留所兼馬屋となったと言われている。この馬屋の許可は1801年に旧建物の所有者となって

50) Bancroft, *Slave Trading*, 46. 1812年以前は、ワシントン郡、アレクサンドリア郡の双方を行き来した奴隷に関しては自由になることが可能であった。法律上「売るため、または住まわせるために」奴隷を特別区内に連れてきた場合は奴隷は自由になると定められていたためである。

51) Bancroft, *Slave Trading*, 23-4; Gudmestad, “Slave Resistance, Coffles, and the Debates over Slavery in the Nation’s Capital,” in *Chattel Principle*, ed. Johnson, 74. Deyle, *Carry Me Back*, 225-6. 引用は *Alexandria Phoenix Gazette*, June 22, 1827 より。ウォルシュによると、アレクサンドリアの位置するポトマック川の南側地区はアフリカからの奴隷の直接輸入では到着地としてはチェサピーク湾岸地域では最も重要性が低く、数も少なかった。Walsh, “New Findings,” 11-21. コロンビア特別区内での奴隷取引については William T. Laprade, “The Domestic Slave Trade in the District of Columbia,” *Journal of Negro History* 11 (Jan., 1926): 28-31 参照。

いたジョン・ホジキンス (John Hodgkins) に対して下りていたが、同時にアレクサンドリア市当局からこの施設において、馬車や馬を売買する許可も出された⁵²⁾。

19世紀初頭にマーケット・スクエア近辺に建てられた二つのインディアン・クィーンは娯楽や食事だけでなく、馬や馬車の取引所・停留所として機能することになったが、同時にこの場所が奴隷の売買も行う場所になっていったことが記録されている。1806年にホジキンスは奴隷の購入を希望して店内に広告を出し、酒場によく出入りしていた奴隷取引商人のロビンス・ウィリアム・アンド・カンパニー (Robbins, William & Co.) の関係者もまた、その場所で20人から30人の若い奴隷を購入したいと広告を出している。1809年には別の広告で、「3, 4人の若い奴隷に現金を払う」とあり、1810年にはある奴隷商人が「30人から40人の奴隷を購入したい」と酒場と新聞紙上に広告を出していた⁵³⁾。

1810年にホジキンスは酒場を売り払い、その後10年ほどはその酒場の所有者が不明になるが、1822年には所有者がイリアス (イーライ)・P・レッグ (Elias P. Legg) に変わっていた。レッグは、インディアン・クィーンで「年間130ドルで下宿人を受け入れる」と同時に、「最良の酒で埋まっている」酒場の経営を行ない、彼の経営の下で酒場は活発な取引拠点として栄えることになる。レッグは1818年以降、同じくキング通りにあるベル・タバーンという店舗を所有していたが、ベル・タバーンを経営していたころからすでに奴隷取引と関わっており、インディアン・クィーンでもその取引を継続した⁵⁴⁾。

上記に述べたとおり、1800年代からインディアン・クィーンでは奴隷取引が始まっていたが、地元の新聞広告では特に1810年代後半以降、キング通りとマーケット・スクエアがアレクサンドリアの奴隷取引の中心になっていたことがうかがえる。レッグの酒場はその中でも最も活発な取引所の一つになった。キング通りの奴隷商人のジョン・L・アルフォード (John L. Alford) は1817年3月22日のアレクサンドリア・ガゼット紙上で、レッグの酒場で「数人の若い奴隷を現金で購入する」と広告を出し、1820年には奴隷を運ぶためニューオーリンズへ向かう船の広告を出していた。キング

52) Powell, *Old Alexandria*, 125; Miller, *Artisans and Merchants*, “John Hodgkin,” 207-8, “Indian Queen Tavern,” 225.

53) Miller, *Artisans and Merchants*, “Robbins, William & Co.” 80; “John Hodgkins,” 207-8; “Giles Harding,” 184; *Alexandria Gazette*, June 10, 1807, July 20, 1810.

54) Miller, *Artisans and Merchants*, “Indian Queen Tavern,” 225; “Bell Tavern,” 29.

通りのマシュー・ホブソン (Matthew Hobson) という奴隷商人は「レッグの酒場で奴隷に最も高い価格をつけて買う」広告を出し、同じくアレクサンドリアを拠点とする奴隷商人のウィリアム・ベッカム (William Beckham) は経営するベッカム・アンド・ブラウン社 (Beckham & Brown) の名で、1820年の3月と9月にそれぞれ、レッグの酒場で「奴隷購入を現金で行う」広告を出していた。南部最大級の奴隷取引会社のフランクリン・アンド・アームフィールド社 (Franklin and Armfield, 以下 F&A 社) も1828年にアレクサンドリアに拠点を置く前から、レッグの酒場で奴隷を取引している。1828年5月に同社は「100人の奴隷を購入したい」ことを宣伝し、奴隷を売却したい者は「セント A (セント・アルフ) 通りのイーライ・レッグ氏に尋ねること」としている。この宣伝は F&A 社がアレクサンドリアのデューク通りに3階建てのレンガ造りの建物を借り、奴隷の監禁所兼事務所としての本部を設ける1か月前に出されたものであった⁵⁵⁾。

1820年代に F&A 社のパートナーになるリッチモンドの奴隷商人のライス・C・バラ

55) Miller, *Artisans and Merchants*, “John L. Alford,” 9. “Matthew Hobson,” 207; “William Beckham,” 27; *Alexandria Gazette*, March 22; April 11, 1820, May 8, 1828; November 13, 1817; *The Times & Alexandria Advertiser Newspaper*, March 31, 1820 and September 14, 1820. F&A 社は南部内取引の最大業者の一つで、アイザック・フランクリン (Isaac Franklin) とジョン・アームフィールド (John Armfield) が設立し、南部中に多くの代理人を抱えた。実質活動期間は1828年から1836年であるがその間、年間平均1,000人以上の奴隷を南東部から南西部に送り込み、合計300万ドル以上の利益を上げたと推測されている。F&A 社の本部は1315 Duke Street にあり、現在はフリーダム・ハウス・ミュージアムとして一部公開されている。19世紀前半は周辺の建物はほとんどなく、裏の大きな庭全体をフェンスで囲っていた。<http://www.hmdb.org/marker.asp?marker=27619>参照。この本部は3階建てのレンガ作りで、常に50人から60人の男性、30人から40人の女性奴隷が西部へ送られるまでの時間を過ごした。その後この建物は地元の奴隷商人で同社のパートナーであったジョージ・ケップハートに売却された。ケップハートは様々な手を加え、機能的で安全な監禁所に変えていった。多くの奴隷制廃止論者がこの建物を訪れ、記述を残しているが、それらによると、建物内は清潔で、入口にはシンプルに Franklin & Armfield とだけ記されていたという。建物の表以外は白いフェンスで囲われ全体で300フィート四方ほどあり、中には2階建ての奴隷用の建物や、高いレンガの壁によって分断された2つの中庭が男女用に設けられ、それぞれの中庭は50フィート四方程度で、一部屋根があり、中央に通路があってそれぞれ「強固な鉄の扉で閉じられていた」という。奴隷の衣食住に関する環境は良く、寒いときは奴隷のいる場所にストーブまで設けられていた。Donald M. Sweig, “Reassessing the Human Dimension of the Interstate Slave Trade,” *Prologue: the Journal of the National Archives* 12 (spring, 1980): 7-9. なお、同じ Duke Street には後にアレクサンドリア最大の奴隷商人となるブルイン・アンド・ヒル社 (Bruin and Hill) のジョセフ・ブルイン (Joseph Bruin) の監禁所兼事務所があり、現在も建物は残っている。



写真1 アレクサンドリアの奴隷監禁所兼事務所, 1863年

注) この監禁所は旧F&A社の所有で、撮影時は奴隷取引商人プライス・バーチ・アンド・カンパニーの所有になっていた。

出典) William Redish, photographer. "Alexandria, Va. Price, Birch & Co., dealers in slaves, 283 Duke St." Photograph. Washington D.C.: Library of Congress, 1977. From the Library of Congress, *Selected Civil War Photographs, 1861-1865*. [http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/i?ammem/cwar:@field\(NUMBER+@band\(cwp+4a39626\)\):displayType=1:m856sd=cwp:m856sf=4a39626](http://memory.loc.gov/cgi-bin/query/i?ammem/cwar:@field(NUMBER+@band(cwp+4a39626)):displayType=1:m856sd=cwp:m856sf=4a39626) (accessed August 3, 2010).

ード (Rice C. Ballard) は、F&A 社の本部がアレクサンドリアに建設され、同社とパートナーシップ契約をする以前から、市内で奴隷取引を行なっていたことが分かっている。1822年1月2日のアレクサンドリア・ガゼット紙の広告によると、バラードはレッグの酒場に奴隷と馬の両方を売りに来たことが分かっている。1822年の2月16日には、グレイブス・アンド・バラード (Graves & Ballard) が「キング通りのイーライ・レッグの酒場で15人から20人の好ましい奴隷を購入したい」と広告を出している。F&A 社設立前のジョン・アームフィールドも独立した奴隷商人としてレッグの酒場で奴隷を購入していた。彼は1826年6月7日に、セントA通りのレッグの酒場で40人の奴隷を現金で購入する準備がある広告を出し、1827年5月にも同じくその場所で現金で奴隷を購入する広告を出した。ボルチモアに拠点を置いていた奴隷商人のオーステ

イン・ウールフォーク (Austin Woolfolk) も、レッグの酒場で奴隷を取引しており、レッグの酒場が広範な地域から奴隷と商人を集める拠点となっていたことがうかがえる⁵⁶⁾。

レッグ自身は1823年に一度破産し、その後元々所有していたベル・タバーンを奴隷取引に来る商人用の宿泊施設に改装した。1824年には西部に移住する決意をし、自分の酒場で家財を売り、翌年には50人から60人の奴隷を購入してテネシーの農場に送り込む予定を立てた。レッグはテネシーで農場経営をしながら、アレクサンドリアの酒場の経営もしばらく継続し、1820年代後半になってもアレクサンドリアの「レッグの酒場」を取引拠点とした広告が紙上に現れていた⁵⁷⁾。

レッグが西へ移住した後、アレクサンドリア近辺の奴隷の売買とオークションの中心地は変わったと考えられる。1830年代にジョージタウンでの取引の多くがワシントンに移っていったが、新聞広告に登場する取引箇所はワシントン内が増え、ワシントンの南西7番通りとペン通り (Penn Street) の北西の角に位置したロイズ・ホテル (Lloyd's Hotel) やロイズ・タバーン (Lloyd's Tavern)、その少し南側のアイザック・ビール (Isaac Beer) の酒場で取引が多く行なわれた。ジョージタウンではジョージ・マクキャンドレス (George McCandless) の酒場の取引は継続したが、ワシントンのラファイエット・タバーン (Lafayette Tavern)、ギャズビー・ホテル (Gadsby Hotel)、ロビース・タバーン (Robey's Tavern)、そして「黄色い家」の異名がついた奴隷商人ウィリアム・H・ウィリアムス (William H. Williams) 所有の建物などが取引の中心となった⁵⁸⁾。

「黄色い家」は3階建てのレンガ造りの建物で監禁所として使われ、ロビース・タバーンと7番通りと8番通りの近くに位置し、壁に黄色い漆喰の塗られた建物であった。

56) Miller, *Artisans and Merchants*, "R.C. Ballard," 20, "I.S. Graves," 145, "Graves & Ballard" 145; "Austin Woolfolk," 389; *Alexandria Gazette*, January 2, 1822, February 16, 1822; June 7, 1826, May 8, 1827, December 14, 1824.

57) Miller, *Artisans and Merchants*, "Elias P. Legg," 219; *Alexandria Gazette*, June 19, 1823, November 25, 1824. ウールフォークについては William Calderhead, "The Role of Professional Slave Trader in a Slave Economy: Austin Woolfolk, a Case Study," *Civil War History* 23 (Sept. 1977): 195-211.

58) ジョージタウンを拠点とした商人にサミュエル・J・ドーソン (Samuel J. Dawson), ジェシー・バーンハード (Jesse Bernhard), サミュエル・ミーク (Samuel Meek), ジョン・M・ヘンドリクス (John M. Hendricks) などがいる。Bancroft, *Slave Trading*, 47-8.

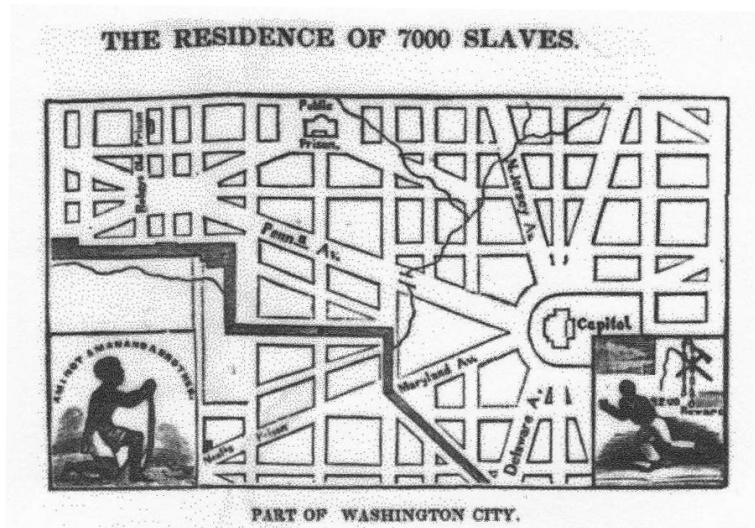
奴隷の許容数が大きかったことや使用料が安かったことから、監禁所としては最も利用された⁵⁹⁾。「黄色い家」の最大の競争相手がロビース・タバーンで、酒場兼奴隷監禁所として活気があったと言われている。その建物は14、15フィートの高さの木の柵が設けられ、奴隷の逃亡を阻止していた。また、大会社に成長しワシントン市内に監禁所があったジェームス・W・ニール・アンド・カンパニー (James W. Neal & Company) も「いつでもロビース・タバーンで取引する」という広告を出し、自社経営の監禁所だけでなく、ロビーの監禁所も利用して奴隷を購入していた。(地図3)

ウィリアムスは「黄色い家」の管理に加え、取引商人のジェームス・H・バーチ (James H. Birch) と共に奴隷取引を行ない、彼らの会社は特別区内ではF&A社やジェームス・W・ニール・アンド・カンパニーに匹敵する最大級の取引規模の業者に成長した。その後、F&A社が1836年に解散後、F&A社の所有であった奴隷船 Tribune と Uncas を購入し、彼らに代わってアレクサンドリアとニューオーリンズ間の奴隷船を航行させた⁶⁰⁾。

F&A社解散後、アレクサンドリアのデューク通りの監禁所兼事務所はジョージ・ケップハート (George Kephart) が買い取り、同社が所有していた奴隷船 Isaac Franklin も購入して定期的にニューオーリンズに奴隷を海上輸送した。ある旅行者の記録では1841年の時点でデューク通りのこの建物は一時に300から400人の奴隷を抱え、そこから年間1,500から2,000人近くの奴隷が南西へ送られたと言われ、それが確かであれば、ケップハートはF&A社を超える規模で取引を行なったことになる。1859年には、30年代からワシントンで活動していたジョージ・ケップハートとウィリアム・

59) ウィリアムスは1836年以前には小規模な取引しか行なっていなかった。黄色い家の建設はロビース・タバーンと明確に区別する目的もあったと言われている。誰でも利用できる監禁所は特別区内には決して多くはなかった。特別区内に持ち込まれる奴隷は、一度の航海や陸路での輸送に十分な数が揃うまでの短期間しか区内に滞在しなかったため、それほど多くの監禁所を必要としなかったことや、ジョージタウンやアレクサンドリアに分散する傾向にあったと言われている。こうした奴隷監禁所の使用料は一日単位で、例えば1841年のアレクサンドリアのある施設の使用料は一日34セントであり、南部全体での平均はだいたい25から40セントであった。ウィリアムスの黄色い家の使用料は一日25セントと低く、監禁所としては利用度が高く、1841年に誘拐されたソロモン・ノースラップ (Solomon Northrup) が監禁されたのもこの監禁所であった。ノースラップはその後リッチモンドへと運ばれ、そこからニューオーリンズに送られ売られている。Solomon Northrup *Twelve Years a Slave* (1853 reprint, Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1968); Bancroft, *Slave Trading*, 100.

60) Bancroft, *Slave Trading*, 56-7.



地図3 ワシントン市内の一部 (1836年)

注) ワシントンの中心部に7,000人の奴隷が監禁されていることを批判しているパンフレットの一部分であり、左上方に「ロベース・オールド・プリズン (Robey's Old Prison)」, 左下方に「ニールズ・プリズン (Neal's Prison)」, 上部左寄りの部分に「パブリック・プリズン (Public Prison)」が確認できる。

出典) American Anti-Slavery Society, *Slave Market of America*. Broadside. New York: American Anti-Slavery Society, 1836. From Library of Congress, *Broadside Collection*. <http://www.loc.gov/pictures/item/2008661294/> (accessed August 3, 2010)

H・バーチ (William H. Birch), さらにJ.C. クック (J.C. Cook) とC.M. プライス (C.M. Price) が共同でかつてのF&A社の建物を拠点に、プライス・バーチ・アンド・カンパニー (Price, Birch & Co.) として取引を行なうようになった。ケップハートはその後1861年の春まで営業を続けたが、その後、軍によって同建物が差し押さえられる前にアレクサンドリアを後にしている⁶¹⁾。(図1)

以上のように、アレクサンドリアは陸路・海路両方によって奴隷を西部に送り出す出発地点として特別区内およびチェサピーク湾岸地域一帯の奴隷取引に貢献した。特別区の規制のため、リッチモンドのようにオークション会社による活発な市場の取引ではなく、奴隷集散地・交易拠点として南部奴隷取引を円滑に行う役割を果たすこと

61) Bancroft, *Slave Trading*, 91.

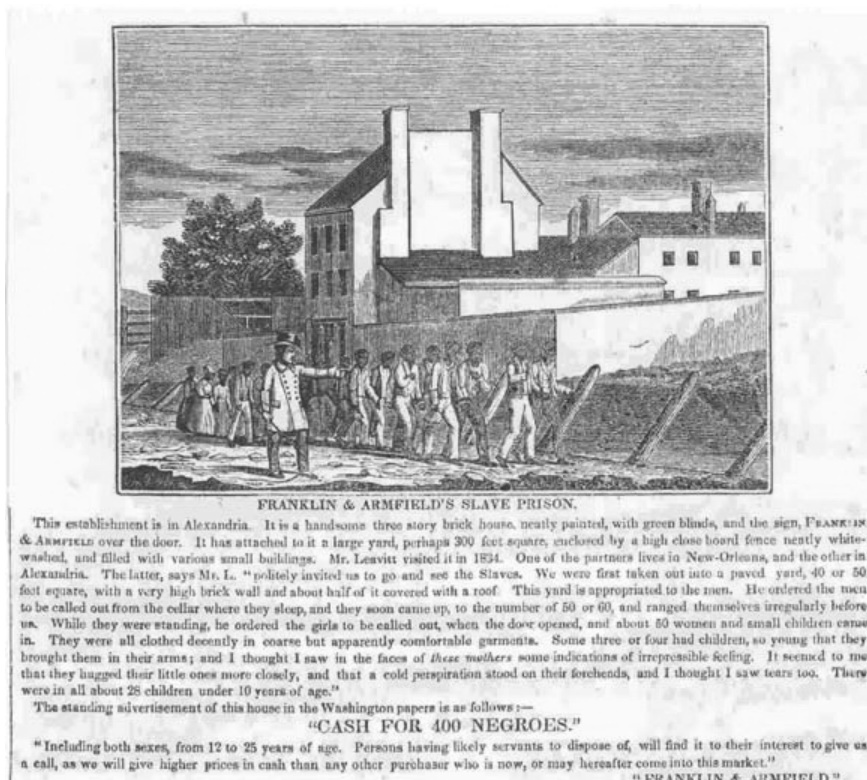


図1 F&A社の奴隷輸送の様子（1836年）

出典）地図3に同じ。

になった。アレクサンドリアのそうした役割を生かすべく、首都での取引に熟知した商人が集まり、結果的に南部で最大級規模の取引を行なった業者が次々この都市に拠点を置くことになった。

3. アレクサンドリアの都市としての位置付け

アレクサンドリアは大規模な取引を行なう奴隷商人が拠点を置き、他の南部の都市同様、自由黒人の労働市場や賃貸奴隷市場も存在したが、リッチモンドと比べると奴隷人口の割合が縮小傾向にあったため、その発展も限定的であった。また、コロンビア特別区の一部としては、近隣の州から集められた奴隷が西部に向けて売られる経由地点であり、リッチモンドのように南部全体の奴隷価格動向に影響を与えるような市場としての特質はなかった。リッチモンドは製造業の発展で市内の奴隷人口が南北戦

争まで増え続け、賃貸奴隷市場の需要がかなり高かったため奴隷市場の規模も拡大を続け、バージニア州および南部奴隷制社会全体への影響力の面ではアレクサンドリアを上回った。

特別区内全体で見ると、奴隷人口は1800年から1820年の間に2倍になったが、1840年代から減少傾向に入った。1830年代に特別区内の奴隷人口がピークを迎え、奴隷取引もその時期に最も活発に行なわれた。南部社会の後進性や残忍性の象徴として奴隷取引を非難した北部の奴隷制廃止論者や民衆は、とりわけ首都で取引が行なわれていることを格好の攻撃材料にした。特別区内の奴隷監禁所は連邦議会議事堂から見える場所で運営されていた。こうした反奴隷制感情に刺激され、1820年代以降、区内の住民も連邦政府による奴隷制支持を攻撃し始め、1828年には特別区の住人1,000人以上が区内での奴隷制を段階的に廃止する要請を提出した。1830年代には議員が揃って「コロンビア特別区では大規模で非常に残忍な奴隷取引が行なわれている。オークション業者の赤い印が国会議事堂の旗の下に留められている」と批判し、多くの賛同を得ていた。ニューイングランド反奴隷制協会は「コロンビア特別区は周辺の州から送られる人間を取引し、それらを南部に供給する巨大市場である」と指摘している。奴隷制廃止論者から見ると、国家の膝元で堂々と行われる取引は国の名を汚す行為以外何ものでもなかった。1849年にホラス・マン（Horace Mann）は下院議会でスピーチを行ない、後悔と憐れみを込めて「人間が家畜のように監禁されて」いることを嘆き、ポトマック川沿いに「奴隷商人が出現し、この市場に人間の行商のために出入りし、商業上の手続きを済ませて持ち主が変わると、その後再び（西部の米、砂糖、綿花プランテーションに）送られる」ことを非難した⁶²⁾。さらに何年も前に連邦が禁止した大西洋奴隷取引での奴隷輸入になぞらえ、連邦議会の権限とワシントン市は「アメリカのコンゴ」であり、ポトマック川とチェサピーク湾は「アメリカのニジェール川とベニン湾」にあたると指摘した。コロンビア特別区は政府による巨大な収容所であり、そこから西に向かって奴隷の列がなされ、奴隷船はかつて大西洋を渡ってアフリカか

62) Laprade, "Domestic Slave Trade," 27; Horace Mann, *Slavery: Letters and Speeches* (Boston, 1851), 121-8, 144-47, 150-52, in Conrad, *In the Hands of Strangers*, 157-163. 下院議会でのスピーチは "On Slavery and the Slave Trade in the District of Columbia," February 23, 1849. 西インドのイギリス領の奴隷は1834年に解放され、その後アメリカ本土の奴隷制廃止運動が加速した。Fehrenbacher, *Slaveholding Republic*, 121.

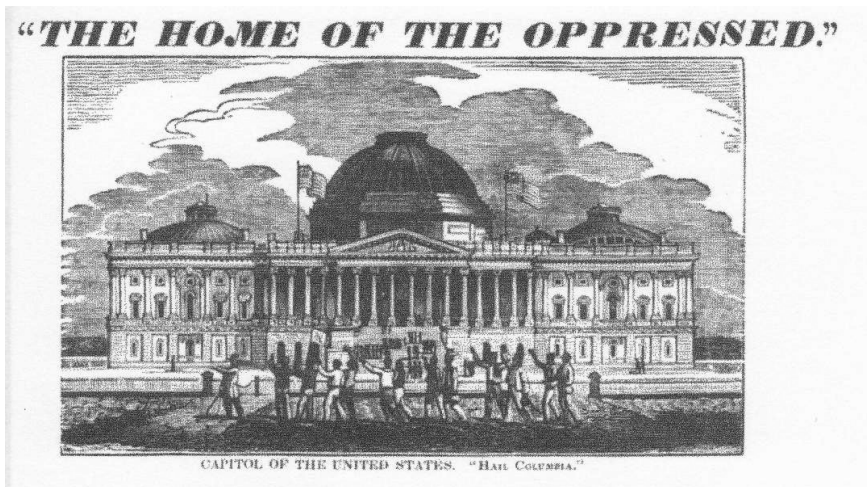


図2 国会議事堂前での奴隷取引への批判（1836年）

出所）地図3に同じ。

らやってきたように、新しい場所へと送られていった⁶³⁾。

アレクサンドリアは1846年にコロンビア特別区からバージニア州の一都市として復帰したことで、特別区内を拠点としていた奴隷商人らがアレクサンドリアに再集結し、奴隷取引の重要な拠点であり続けた。1850年の妥協の決定事項としてコロンビア特別区内で奴隷取引を行なうことが禁止されると、アレクサンドリアの市場としての重要性は一層強まった。1850年の妥協の結果は、今後の奴隷取引規制の前例となる可能性から、多くの南部人に不満を残した。一方、政府としては、北部からの奴隷制廃止運動の圧力に応じた妥協であったが、奴隷制廃止論者にとっては不十分な結果であった。この妥協では、区内での取引、他地域で売却するための奴隷の流入を禁じたが、既に区内にいる奴隷を区内もしくは他地域で取引することについては規制せずそれまでどおり継続し、廃止論者が強く要求した区内の奴隷制そのものの廃止には至らなかった。後に奴隷制廃止論者のウィリアム・ジェイ（William Jay）が、「奴隷を売却のために特別区内に持ち込むことを禁じたことで首都の性格としてはプラスに作用したが、ワシントンからアレクサンドリアに取引の拠点が移動しただけで、人道的観点からは何ら効果はなかった」と述べている。

63) Mann, *Slavery: Letters and Speeches*, 144-47, 150-52.

一方、南部人にとってはワシントンでの奴隷取引への攻撃は、南部奴隷制への攻撃の開始を意味した。奴隷制廃止運動は、南部にとっては奴隷取引および奴隷制度そのものを廃止へと導く「最初のくさび」として解釈され、南部ナショナリズム思想の浸透を加速させ、結果的に南北の対立を深めることになった。首都ワシントンは南部の玄関口であり、そこでの奴隷取引の廃止は南部奴隷制擁護者にとっては最初の敗北であり、南部全体での奴隷取引と奴隷制度を死守するための闘いが本格化することになった。

結び

リッチモンドとアレクサンドリアの発展を見ることによって、バージニアにおいて国内奴隷取引が都市の性質を生かしながら定着していった様相が明らかにされる。本論では、リッチモンドとアレクサンドリア両方について、他産業や都市商人層の発展との関係を踏まえながら、両都市が奴隷取引においてどのような役割を果たしたかについて説明した。また、両地域において、アンティベラム末期にかけて、奴隷制を擁護し、奴隷取引を維持・継続する姿勢を強めていった様子にも言及した。

バージニアでの奴隷市場の発展は州内の要素だけではなく、州外の要素にも左右された。バージニア奴隷市場に集められた奴隷は州外向けがほとんどであり、国内奴隷市場は奴隷が過剰に存在する州から、奴隷労働を必要とする別の州へ輸出することによって成り立っていた。最大の奴隷供給州であったバージニアへの批判はあったが、南西部で開拓が進み、奴隷の需要がある限り、国内奴隷取引は有益な産業として隆盛し、市も州も財政的にその恩恵を受けた。この取引に参加した商人やプランターの大半は、奴隷取引に対する罪悪感はなく、奴隷の商品化は植民地時代から長い年月をかけて培われ定着した価値観となっていた。

アンティベラム後期になると、奴隷取引は南部にとって政治面・思想面に対して最も影響力のある経済活動になる。1820年から60年の間に国内奴隷取引がもたらした利益は年間平均で1,230万ドルに上ったと言われる。南部経済体制の維持には奴隷制度の存続が絶対条件であり、その体制の安定には奴隷制度を採用する領土の拡大と、奴隷制採用州の増加によって連邦での奴隷州・非奴隷州の均衡を保つ必要性があった。新しい領土へ奴隷を送り込むことは新しい奴隷州の成立へとつながり、その結果連邦レ

ベルで奴隸制擁護の主張を守る代表を送り込み、奴隸制度を長期的に維持していくための枠組みを作ることに繋がった。奴隸制度をより広範囲に拡大することを可能ならしめたのが国内奴隸取引であり、その円滑な運営は南部の生命線であったと言える。

南部のフロンティアが漸進すればするほど、奴隸取引の必要性は確固たるものとなり、取引への支持は浸透・拡大し、南部全体にとって奴隸制度を維持することを絶対視するイデオロギーと結びついた。こうした背景を考慮すると、奴隸取引は南部の奴隸制擁護の思想を結実させるための中核になったと言える。奴隸制存続を支えたバージニアの奴隸供給、その都市における奴隸市場・集散の機能は絶対的な支持の上に成り立っており、戦争に至るまでその機能を死守したことで都市の繁栄も継続した。アンティベラム期に奴隸市場が発達した南部都市はリッチモンドとアレクサンドリアの事例で見たように歴史的背景や周辺地域との関係性もその発展に影響を及ぼしたが、州内外における奴隸取引への認識と容認・維持の体制の確立が、都市と奴隸市場の発展を支えていたという側面も大きかったと言えるであろう。